



目 次

本尊意識に就て……………	聖應院日生
日蓮教學講座(第十九回)……………	河合陟明
法華經講話(第二十講)……………	小林一郎
記事	

○本部圖報各地教信

第十四年八月號

### 財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル活動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

### 本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團 事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ寄附氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 本尊意識に就て

最近信仰上に關する最も重要な、御本尊の意識に就て二三の見解を異にするありて爲めに初学者の迷惑甚ならず。

爰に本多大僧正の卓説を摘録して求道各位の御精進を促し、聊か闇夜の燈明、雲山の寶橋たらしめんと云爾。

(滿生)

## 觀心本尊鈔綱要

### 緣起

本鈔の緣起は副狀に據て大要を知ることが出来る、御遺作の年代は本鈔巻尾の日附の通りで、御歳は五十二歳の時である。副狀の中に、此事日蓮當身ノ大事也とあるが、是れは予の考では、佛勅を奉じて出現せられたる佛敎統一の任務、日本乃至一國浮提末法萬年の模範として、大德敎を建設されることを指すのであると思ふ。佛敎と言つたからとて佛陀の説かれた經説のみではない、其の中には人生の一切の事を包括して居るのである。而して其大事業中の第一中心となるものは、大本尊の光顯である。人類

聖應院日生

思想の統一は學問では真理、倫理では教訓ではあるけれども、佛教では信仰にあるので、此信仰中には道徳教訓も、哲學も、眞理も、皆包容されて居る。で此信仰には本尊の光顯が第一要件たるは言ふを俟たない、故に簡單にいへば、上行の天分は本尊の光顯が其大事である。

本尊には佛滅後二千二百二十餘年未曾有の大曼荼羅とあるが、全く佛陀出世以來信仰を捧ぐるにかゝる完全なる對境は未曾有である、而して其大本尊を顯はすに先立つて自ら之が解釋を施されたのが本尊である。猶ほ本尊以外に本尊得意鈔なる一書があるけれども、此は天台過時の述門を修業することを誡められたもので、本尊とは何等關係の存するものでない。

さて本尊中肝要なるは、三寶と吾人との關係を明示されたる點にあるので



開目鈔講述の時に云へる如く、宗教の本質としては、吾人と本佛との關係にあるので、これが本法及び本化に關係して來るのである。吾人と最も近き關係を有するは、日蓮聖人で、今の遣使還告とは地涌なりとて、本佛が日蓮を使はして此の間の繋りを付けられたのである。

そこで開目鈔と本尊とは別に其の趣意の幾つたのではなく、開目鈔は既述の如く、何日死んでも宜いやうに大事の法門を書き盡されたのであり、本尊は當身の大事であるから共に最も注意すべき御書であると信ずる。而して此の兩書の第一義たるものは何であらうか、曰く一念三千の精神的關係にある。天台に於て説く一念三千は吾人と佛陀との必然的關係であつて、これは宗教の基礎的の理論に過ぎないので宗教の本質ではない。日蓮聖人の解釋せらるゝ一念三千は、佛陀の大慈悲と之を渴仰する吾人の精神との關係する所にあるので、是れ即ち宗教の本質たり且つ尊い所であることを忘れてはならぬ。そして此繋り處が妙法蓮華經の五字に依るので、これは受持の最良形式として結要されたものである。又吾人の一切行、一切願皆此一點に聚まり、救の手も、出離の手も此處に繋がるのである、されば開目鈔も本尊鈔も一點の相違點の無いことが解るであらう。

然らば本尊が宗學上の位置は如何であらうか、其は開目鈔と同等であるけれども、開目鈔の方は記述が明晰であるから一切の教義を判斷するには適當であるが、本尊は開目鈔に比して今少し明晰ならざる點がある。故に研究上の得失からいへば、開目鈔を最上とせねばならぬ、が、併し本尊の特色とする重なるものは二點ある、即ち

特色

- 本尊異争の解決
- 信智二行の統一

是れである。第一の本尊異争の解決とは、本尊を解する概念に就て、御遺文中矛盾の如く見ゆる處がある、即ち本尊問答鈔には妙法を本尊とせよとあり、法華取要鈔中には教主釋尊を本尊とせよとあつて、古來甚だしき争論のあつたのは事實でもあり、今尙其の餘波を受けて明確なる意識を得て居ないものもある。元來さしたる價值のある争論でもないが、兎も角も本鈔に依れば明かに解決が付けられる、此點は開目鈔の本鈔に及ばざる處であらう。

次に第二の信智二行の統一とは、聖人は決して智慧を捨てられたのではなく、智慧の極處に信仰を立てられたので、一念三千の法門をふりすゝぎて書きたる大曼荼羅なりとは此の間のことをいふのである。故に眞理の極處、理性の極點に立てたのが、日蓮主義の信仰であると言はねばならぬ、されば信智の二行を合せたる信仰といふべきである。此を妙信とも、大信とも、圓信とも謂はれるであらう。換言すれば智情意の共同作用とでもいふか、全意識の發現であつて、決して智を捨てたものではない。尤も智情意が等分に含まれて居るとはいへないが、其の多少こそはあれ、この三が融合されて居るものである。觀心とは是をいふので、又立正觀と言はれた所以である。で、此の全意識を世には容智とか、聖智とかいふのであるが、此の智を信に代へた意である。儒教でいふ誠も同じで、なほ言ひ換へると、天台の純智的なる智行と、淨土門の純信的なる信行とを統合したるものと云ふべきである。以上に依つて本鈔は本尊の解釋と信智妙行とを教へたものであることが解つたであらう。

大 要

初めに天台の一念三千の出處を考へて萬有相關の眞理を教へ、佛敎眞理觀上の留をさしたものである例せば小乘の業感緣起の説も此一念三千の中に含まれて居る、即ち十如の因果の中に向下的なる罪惡によつて苦果を感じ、向上的にして佛菩提に向へば佛樂を得る。又賴耶緣起とは、賴耶とは一切の含藏を意味するのであるから、往いては一念三千の一念と異なる所はない。或は眞如緣起の差別平等、隨緣不變との意義は一念三千の互具互融の意義の中にある。或は又華嚴の法界緣起、無盡緣起、眞言の六大緣起等は三世間の國土世間五蓋世間の中に一切は包容されて居る。

繪圖遺文九二八頁四行目の問曰 からは、天台が一念三千を以て一代佛敎の本意を現した、説己心中所行法なることを明し。

九二九頁三行目の 夫智者弘法云云よりは、一念三千とは草木國土も互具せりと説く色心不二の一元哲學なるを明すのである。故に木書の二像を本尊とするもよい、寧ろ世に木書の二像を本尊として居るが其は此の眞理觀に據らねば成り立たないのである。

次に九三〇頁五行目の 問曰 出處既聞之から 百界千如一念三千也までは觀心の意義を明したのである。觀心とは内省法の意で、萬有を心外無別法と見るのである。併し此中に心得て置くべきことは、

吾人の劣心に尊特佛を具せざるや否やといふ所が觀心の出發點たることで、開目鈔に一念三千は十界互具より事はじまると仰せられたのは、こゝで絶待と吾人との關係を説明するにあることである。

次に同行の 問曰法花經より九三二頁六行目の 佛界所具十界也までは、一念三千の經文の出處を明したのであるが、又吾人には十界を相互に本具せることを明したので、開目鈔の九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に具すといはれたのと同じである。そして此の中に開佛知見の文を引證してあるが、此の開の字が實に宗教的の意義があるので、哲學的の解釋ではたゞ本具を論じ必然的關係を明すだけであるが、宗教的には此の開といふ向上的努力に其の意味が有ることを知らねばならぬ。

又次の 問曰から九三二頁八九行目の 具足佛界故也までは、十界互具の事實を論ずるので、前のは經文の證を擧げたから聖教量であり、此は現量である。

此から九三三頁九行目の 可信之也までは吾人の劣心にも佛性を具せることを明し、水中の火、火中の水、信じ難しと雖も千尋の水底にも火ありとなし、而して涅槃經の悉有佛性を證明するのであるが、此の『我等劣心具佛境界』といふ文が最も着眼すべき所である。

續いて 問曰から九三四頁十一行目の 不可信之までは論所具の事佛を擧ぐるので、萬有神教的に云へば、一塵一石も神であるが、聖人は必然的關係より精神的關係に移り、理佛より事佛に移つて論せらるる所が尊いので、吾人にも具體的人格的の具せることを證するので、理論上の互具を究極とするの

ではない、是れ聖人獨特の觀察であるから『自之堅固秘之』と傍註まで入れてある。

次の 以此から九三六頁八行目の 何所示也までは諸經の佛身觀を述べ、それより十三四行目の 内典聖人也までは精神的關係を述べたもので、此問題は九三九頁まで續いて居る。此の中の國王と夫人との譬を擧げてあるが、菩提の子とは信心をいひ、國王と夫人とによつて生れるのである。故に普賢經に『從方等生』とある、で、吾人は須らく本佛の妙化を知らねばならぬ。壽量品に『每自作是念以何令衆生』とあるが、是念とは本佛の意で、以何とは現身の佛身を以てし、又は説法の教法を以て衆生を教化せらるゝ事である。又『本有三因』の中に於ては、了因佛性が最も尊いのであつて、正因佛性とは素質即ち儒教でいふ明德の如きもので、緣因佛性は此の明德を明かにする資助であり、而も了因は其の資助中最善なるもので、本佛釋尊によつて顯はるる信心を指すのである。故に三因中には了因を最も大切とする、更に進んでいへば、妙法五字を此の佛と吾人との中間に入れて、受持を以て吾人との繋りを附けるので、其の受持とは即ち信心である。而して此の妙法五字には、釋尊の因行果徳の二法を具して居

ることは勿論である。換言すれば、佛陀の大慈悲と吾人の向上心とが合する處妙法五字である。で其の受持の信心と讓與の大慈とが即ち精神的關係であつて、こゝに妙信がある。大凡佛智といへば眞理を包んで居り、慈といへば智と理とを包容して居る、而して其の慈は活動性のものであるから發動して慈善根となり、此の慈善根は功德を生み、其處に力を有つて居る即ち佛力となる。故に因果の功德といへば

一切のものを包含して居る事を注意せねばならぬ、然るを妙法といへば、眞理のみなるやうに考へて居るの、は誤りである。

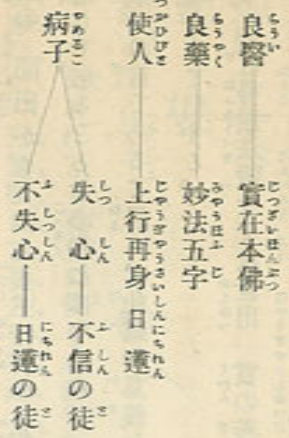
次に九三九頁十一行目の 夫始から九四〇頁二行目の 故歎までは、本國土を論じたので、日蓮主義の本國土とは、單穢土、單淨土にあらず、本時と娑婆との統一土である。而して佛の實在常住なるが故に土も亦常住なので、淨土宗などの淨土は能居の佛が無常を免れないのであるから、淨土も隨つて無常であると論破するのである。

其の次からは此の教の付屬を明し、其本尊爲體からは本尊の相を示されてある。妙法は、佛陀と吾人との接觸の最終形式であつて、佛陀は中心である。壽量品は即ち佛を中心としての説相である。又法蓮鈔には、佛は母、五字は乳房、赤子は吾人として解釋してある。若し妙法を本佛と離して説かうとするものは、眞言の阿字觀と似たるものであらう。

次は同頁 問正像二千餘年之間から九四二頁六行目の 尙劣旃陀羅までは序正流通を明し、種熱脱を論じ眞實の種熱脱は久遠無始の化より始め、無終不滅の終を認むるにあらざれば眞の種熱脱ではない、之を知らねば小乘の灰斷に同すと決し、次下よりは此の佛教を昔の古物と見るか否かによつて在滅判を爲すので、經證を擧げて末法爲正とせられた。而して彼脱此種とは機に約していつたので、佛陀と日蓮聖人との比較でないことを心得ねばならない。

而して 問曰其證如何からは又重ねて經證を擧げ。

九四四頁十一行目の 問曰此經文から同頁終りの 南無妙法蓮華經是也までは使人と良藥とを擧げた此を圖示すれば、



となる。

次に 此良藥より九四六頁十二三行目の 掲拾遺囑是也までは妙法の付屬を明して、其の妙法五字の内容は神力品に於て説明せられ、而して其功德は説くべからずとする。其内容は暫く如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切秘要之藏、如來一切甚深之事に結要して説くも、實に言説の盡す能はざる所である。秀句に於て其の上に一々果分と冠してあるのは、凡て如來を通してななければならぬことを意味して居るので、一々に果分と言つたのは大に注意を要する所である。

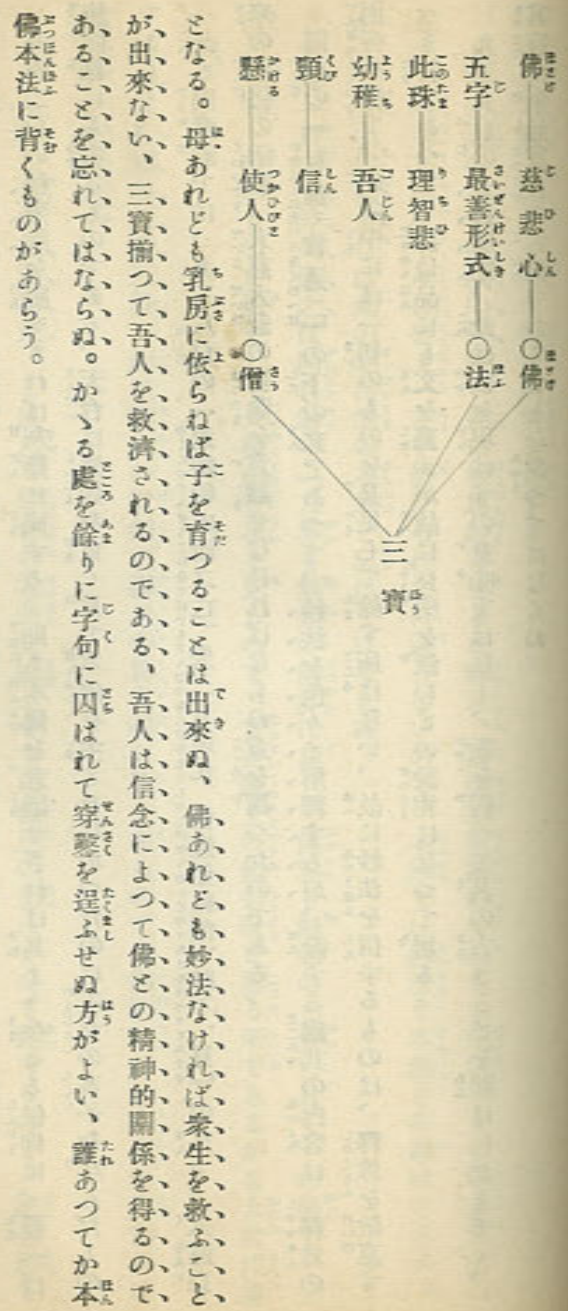
次の疑 云から、前四味機根也までは大白法出現の時を明し、像法中末から九四八頁の初行の 我弟

子惟之までは本尊と題目とを説明して、天台は理論的には明したが、未だ宗教的に其の最善形式の題目と本尊とを説くに至らなかつた、之れまた時機の至らなかつた爲めでもあるとせられた。

其より五行目の弘持正法に至るまでは、法國內面的の一致を明して、此の大徳教を弘持するに、一面には國王となつて出現する形式と、一面には僧侶となつて出現する形式との二方面とがある。前者は折伏的で、後者は攝受的ではあるが、普通に言ふ言論中の攝折ではない、即ち武力を折伏とし、言論を攝受とせられたのである。故に完全なる國家には正法あり、正法の中には完全なる國家があるべき筈で、其の内面は相一致して居る。

次の問曰から九四九頁三行目の先兆歟までは、本尊の顯現を明すので、此の中には甚深なる意義を含蓄して居ることを心得ねばならぬ。「一闍浮提第一本尊可之此國」などは、日蓮聖人にあらずんば言ひ能はぬ言であると思ふ、此處の意義を充分に研究したならば、すればする程限りなく光輝を放つことであらうと思ふ。

次に可得世法歟までは世出一貫の義を説かれたことは、本文の有名なるに依つて言ふを俟たぬことと思ふが、當時の天變地天も上行出現の先兆なることを天台、妙樂の論證によつて證明されたのである。而して是から終までは三寶の調和を明して本尊を結束せられた。此の中「佛起大悲」の文を左に分解して見ると、



### 着眼點

本鈔に對する着眼點中の着眼點を述べて置かうと思ふ。

初に觀心の意義を知らねばならぬ。觀心とは、吾人の心と尊き佛陀との迷悟の關係を觀ること、即ち迷中の吾人中に完全なる佛陀を見出すことである。

九三六頁に至つては觀心の意義の發展である、佛陀と吾人との關係を一層深く即ち國王と、夫人と、所生の子の如くに觀るので、此は理論的に必然的關係を謂ふ其の上になは精神的關係を見出したので、實際的に發展した眞理觀上の達觀である。吾人はかゝる眞如實相の中に活動性の意義を有して存在し、常に向上向下の二活動の絶へないものである。茲に宗教的の眞價あり、日蓮主義の天台よりも百尺竿頭一步を進めた所以が存するのである。

九四二頁の種、熟脱を論ぜざれば灰斷に同する、即ち本佛を意識せざれば其より生るる信仰は、譬へば旃陀羅にも劣るものである、天台は眞如を重く見て本佛を主とせなかつたのは王女の畜子を生んだものであらう。

此と同意義では、九三八頁の「遠疾頓成設之亡失三五遠化」化道始終創跡不見の文で、久遠以來の權化の活動、大慈大悲の發動を意識せなければならぬ意を謂つたのである。

同頁の「私加會通」の下の文であつて、妙法を色々解釋するが、詮する處其の内容は釋尊の因行果徳で、此の中には一切のものを具足して餘す所はない、故に妙法を信するものは、釋尊を敬慕すべき筈であつて、壽量品にも文を慕ふが故に良藥を飲むとの説相になつて居る。

九三九頁の五百塵點、此は數を現はすの意味ではなく、數を假つて其の古きことを顯はしたまで、其實は無始實在の古佛であることを誤つてはならぬ。

次に本國土妙の一段は特に研究を要する。

九四〇頁の本尊相貌の解釋、此は報恩鈔に依ると釋尊、持法華問答鈔に依ると題目とする等差別はあが、畢竟其都度々々必要上一方を擧げられたに過ぎないので、本鈔では妙法と本佛とを擧げてある、が、吾人の信仰上には此の絶待的の本佛を忘れてはならぬ。

九四一頁の十界久遠之は開目鈔の「九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に具す」の格で、宇宙と平等一理のものとして見すして人格的實在と見るので、實在觀上の他宗教と異なる所であるから大に注意を要する。

同頁の五種の五重三段、此は聖人の教判で壽量の眞意義を見て來るので、佛教統一の中心を定むるに重大なる達觀法である。

次に九四二頁の末法爲正、こは凡て釋尊の説法を遠くせずに自己の上にとつて感ずるので、國を以て謂へば我國、時を以て謂へば末法、末法の中にも今日として感ずる聖人の活きたる解釋である。

同頁の種、熟脱の聖判、之に就て釋尊と日蓮聖人とを三益に配して混亂を來して居るものがある、興門派の如きは特に甚しい、釋尊を脱佛とし、日蓮聖人を今日の下種の佛とするなどは決して聖人の意ではない、釋尊の化導は無始無終で十方世界に遍滿して居る、決して昔あつて今ないといふやうな化導でない、常住實在にましますのであることを忘れてはいけない。



九四四頁の今遣使還告地涌也、に就て良醫と、良藥と、使とを混同せざることを、使は日蓮であつて前に良醫があるのであるから、此の使と良醫、即ち佛と日蓮聖人とを混同してはならぬ。又良藥に就ても依諸經方の時は他の一切經に通ずるが、此は禱符和合といふのであるから、其の純の純なるものを擣ひ取つて消化されたものである、即ち依諸經方は一般の食物、禱符和合は消化、良藥は乳汁である。

九四六頁の果分の法、是れ亦本佛を通じて寫象する處の眞理と異らぬ如實の知見をいふのである。

九四七頁の有圓機無圓時、今末法は圓時にして正しく大法の建設さるべき時である。さればこそ天台も、傳教も、末法を懸ひ慕はれたのであらう、現代の學者の中にも現代を悲觀する人もあるやうだが、其人達は現代こそ大教法の建設さるべき法運佳會の好圓時たるを知らぬからである。猶ほ此の機と時に就ては、撰時鈔に於て述べた相違のあることを見逃してはならぬ。

九四八頁の地涌千界教主釋尊初發心弟子也、とは他鈔に「五百塵點劫より已來一念も佛を忘れましまさざる大菩薩なり」であること云ふのである。

同頁の一閻浮提第一本尊と及び法國内面一致は共に大要に於て略説して置いた。

天晴地明の文によつて一方よりは大宗教の建設であり、一方より見れば大德教の建設が、聖人の任務であつた事が解る。

聖人の抱負、蛇は自ら蛇を知ると述べ、當時我國の悲風慘雨は、是れ大德教の現はるゝ前兆なりと

せられた其の遠大なる抱負と、其の高邁なる警眼とは以て畏敬せざるを得ない。

三寶調和關係、吾人の苦難を救はんが爲めに佛陀は大慈悲を以て此の妙法を授けたまふた。而して此の妙法を授ける爲めに上行再身の日蓮を遣はされたのである、されば之を一體三寶と見るにあらず、別體三寶と觀るに非らず、佛を思ふ時は必ず妙法を信じ、妙法を信する時は又佛を慕ひ宗祖を思ふので、此の間自然の調和は無限の裡にとれて居る、別に彼是と理窟を付ける必要はない。

### 古來の争點

次に古來の主なる争點を摘解して置かう。

(一) 人本尊と法本尊との争、人は實在の本佛、法は妙法であるが、これは乳と母、良醫と藥との如く見るべきものであつて一方に偏よつて見るのはいけない。

(二) 信行智行の争、此は前にも述べた通り知識の極處に信行を用ゆるので、信智の融合されたものが聖人の信仰で、是亦一方に偏すべきものでない。

(三) 種熱脱に就て、今日は下種益の時ではあるが、別に釋尊以外に下種の師がある譯ではない、日蓮聖人を末法下種の師となすなどは大なる誤である。釋尊は實在不滅であつて今とても下種の師たることは定まつて居る。餘り一局部に拘泥しないやうに觀るのが肝要であらう。



つら〜(微管(文筆)を傾け、いさゝか經文を  
 披きたるに、世皆正に背き人悉く惡に歸す。故  
 に善神は國を捨て、相去り聖人は所を辞して還ら  
 ず、是を以て魔來り鬼來つて災起り難起る。言は  
 ずんばある可からず、恐れずんばある可からず。  
 しかるに盲瞽の輩、迷惑の人、妄に邪説を信じて  
 正教を辨せず、故に天下世上諸佛衆經に於て捨離  
 の心を生じて擁護の志無し。悲しい哉數十年の間  
 四千萬の人、魔縁に誘はれて多く佛教に迷へり  
 傍を好んで正を忘れんに善神怒を成さざらんや、如  
 闇を捨て、偏を好まんに惡鬼便を得ざらんや、如  
 かす彼の万祈を修せんより此の一凶を禁せんには  
 弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法  
 の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。  
 親じ來らば彼等佛教を學んで邪道に走れる念佛、  
 眞言、禪、律、諸宗は各その習ふ所に盲ひてわすか  
 に聖教の一義一事に局し、群生皆これ險隘の邪路に

彷徨して未だ佛教一貫の大道に達せず、諸宗亂立の  
 だかも群雄四方に割據し、教界亂れて麻の如きの觀  
 あり、佛法平和の精神こゝに亡し、白法(善法)陰  
 沒の豫言に合す、あ、彼等如きに如何にして大聖釋  
 尊の本懐を聞き得やうぞ、如何にして衆生濟度の大  
 事を托し得やうぞ、はたまた如何にして尊王忠君の  
 大義を求め得やうぞ、世は擧げて邪法に歸し國は既  
 に危殆に類す、もしこのまゝにして放置せば佛教永  
 くその利を失して亡び、國家は將に破滅の悲運に至  
 らん、しかもこの時こそ一大白法(一大正法)顯れ  
 出で滅裂せる解釋を審判し、汎濫たる意見を統一す  
 るの「今正に是れ其の時なり」これ釋尊すでに豫言  
 したまへる所、三國の先賢も亦道破せる所、然らば  
 その一大白法とは何ぞや、曰く法華の大法なり、こ  
 れ佛陀の金文赫々として慈訓嚴誡したまひたる所、  
 敢て私見に非ず誰かこれを譯はん、法華は正に佛教  
 一貫の大憲を確立し一佛一王の大義を確立して、大

思教主釋尊を根本の本佛なりと斷じその絶對的尊嚴  
 を唱道して、こゝに諸佛を統一し、諸教を開顯し、  
 諸宗の信仰を破邪顯正して、佛敎統一の大理想を教  
 ふるもの、諸宗は無得道墮地獄の根源、法華經獨り  
 護國の法なり、汝等何ぞ早く信仰の寸心を改めて速  
 かに實乘法華の一善に歸せざる、汝等何すれぞ經王  
 法華の金文に脊きて法王佛陀の教勅に順はざる、も  
 しそれ一度法華を立つる時は、これ殺活與奪の大權  
 を握るものなれば佛敎一切の大藏經典は悉く蘇活  
 し來たり、法華の大法の下に於てのみ各その宜し  
 きに隨つて取つて用ふべきも法華を離るれば佛敎  
 は支離滅裂し諸經相譯つて爲に世を亂らんこと、  
 あだかも帝王位を失して諸侯互に相凌がんとするが  
 如し、これ心靈界の下剋上なり。然るに汝等は天子  
 の命を奉せずして藩主の私見に就かんとするか、朝  
 廷に抗して幕府に走らば同じくこれ逆賊なり、あま  
 つさへ汝等諸宗は佛法を亂りし謬をそのまゝ俗世

の方面にてもまたかくの如く、醜い哉權勢に阿り武  
 門に眉びたゞ々、幕府の御用宗教となつて悉も民心  
 を匡さず國事を亂せず、あさましい哉封閉的の坊主  
 と爲り果て了んぬ、はたまた然らずんば新海徒らに  
 自ら高うして俗世を空無し、山林に隠れ、或は厭世  
 悲觀わすかに死後に望をかけては國家の亂脈も何す  
 る所ぞ、然れども「極樂百年の修業は穠土一日の功に  
 及ばず」そも、世尊出現の大慈悲活動を何とか見  
 るや、嗚、汝等佛法の叛逆者國家の破壊者、獅子身  
 中の虫!  
 しかも幕府もさるものなり、かくの如き諸宗を許  
 しこれを弘通せしめてこそ自家の地位も安泰なれ、  
 もし正々堂々と大義名分を説く教あらばそは實に幕  
 府の致命傷たらすんばあらず。然り、尊王護國の大  
 宗教は幕府にとつては危険思想なり、憂國慨世の大  
 偉人は武門にとつては仇敵なり、あゝ危い哉、あゝ  
 危い哉

法師は詔曲にして人倫に迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨するなし

今は鎌倉の世さかんなる故に、東寺、天台、園城七寺の眞言師と、並に自立を忘れたる法華經講誘の人々、關東に落下たりて頭を傾け膝をかぐめ、やう／＼に武士の心をとりて諸寺諸山の別當となり長吏となりて、王位を失ひし惡法を取出して國王安穩と祈れば、將軍家並に所從の侍已下は國土の安穩なるべき事なれりと打ち思ひて有る程に法華經を失ふ大禍の僧共を用ゐらるれば國定めて亡びなん。

否、國家の命脈は、既に一度び亡びたるに非ずや、何ぞや、これ言ふまでもなく承久の逆亂なり、承久の亂までは尙國に勤王思想ありき勤王の人ありき、今やかの逆亂を境として國家は精神的に滅亡し國体史上に一大龜裂を生じたるに非ずや、諸宗の亂ももどよりながら、義時泰時北條一門の無道の振舞は

犬二足候

あゝ諸君、何ぞその言辭の痛烈淋漓たることであらうぞ、我等日本の國民感情はこゝまで言はずんば氣がすまざるのである、これが實に我等日本人の道義感であり、名分思想である。見よ聖人の血涙こゝに迸り、悲憤慷慨の念まさに鏗々の響あり、しかもこれを書者の一隅や邊鄙の片田舎ではざいたのではない、飛ぶ鳥落す勢の北條幕府の鎌倉の地なるその眞直中に立つて絶叫したのである。承久亂後の鎌倉時代、そは人間の歴史に非ざりき、そは一片の禽獸史なりき、唯一人、眞に唯一人、我は感謝す、頼ひに我が日蓮聖人の有るありて、漸く禽獸史は人間史たることを得たるなりき。

諸君、尊王忠義の事に就ても後代には種々と言ひ出したが、日蓮聖人の出たる時代には、政權武門に歸し鎌倉幕府が非常な勢力を得てゐた時であつて、神官でも、儒者でも僧侶でも政治家でも誰一人とし

天人共に許さざる所、如何ぞ我れ日蓮大折伏の鐵錘を振はざるを得んや、正に天に代つて磨懲の劍を彼に加へずんばあらず、見よ、一陪臣の分際を以て未曾有の屈辱を皇室に加へ奉り、天子の御身に縲纆の辱しめを受けしめ奉る。嗚！汝 亂臣賊子！

隱岐の法皇は天子なり、權ノ太夫（義時）は民ぞかし、子の親を怨まんをば、天照大神うけ給ひなんや、所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用ひあるべしや

天下第一先代末問の下剋上出来せり  
我朝始まりてより既に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時なり、二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝す、二人は王位を傾け奉り國中を手に握る、王位既に盡きぬ、  
日本國の武士の中に源平二家と申して王の門守の

て幕府を攻撃したものはない、戦さの方では計畫をした人もあるが、大義名分の思想問題として北條が政權を握つてゐるのを論難しない、唯一人敢然立つて極諫を試みたのが日蓮聖人である、徳川時代の儒者の中にも勤王の志の厚かつた人は少くなかつたが日蓮が北條に對した如く猛烈に闘つた者は一人もない、聖人は全く死を賭してをつたのである、故にその言ひ方は頗る峻烈にして秋霜烈日の儼あり、あまつさへ聖人は幕府を開きし源頼朝に對しても逆臣なりと論斷した、それは光圀の大日本史にもこの事を貶してはゐるが、未だ彼を逆臣なりとはいはぬ、また叛臣傳の中に義時を入れてをらぬ、神皇正統記を著した北畠親房も、頼朝、泰時の事を悪くはいつてをらぬ、然るに日蓮聖人は頼朝も義時も泰時も皆逆賊だと斷言した。聖人は「日本に天皇の大權を侵した逆臣が二十六人ある、頼朝も逆臣である」と彈劾した、しかもこれらの頼朝、義時の如き逆賊が榮

えてゐるのは不思議に堪へぬ、否この二人は「王位を傾け奉り國中を手に握る」しかも天誅を免れてゐる不都合な奴だと痛論されたのである。頼山陽も日本外史等に於て義時に對し極力筆誅を加へ「義時の如きは眞に無前の逆賊なり、彼が如きは蛇か虺か鬼か豺か犬畜生である」而も叛名を世に脱るゝを得たる」は何事ぞと叫んだ、然しながら山陽は後世に出で、北條を筆誅したのであり、しかのみならず徳川幕府に對してはなほ從容の筆を用ひ、かの日本外史も、家康の覇府を開きし元和徳武を以て止め、しかもむしろ「これ命の歸する所か」などと、旨くやつてゐる、もとより山陽の眞精神は斷じてかくの如きものではないが、そこには苦衷の在した事であつたらう。然るに日蓮聖人は鎌倉の勢力が現在熾なるその武斷の眞正面に對つて敢然戦ひ行くのである「我身命を愛せずたゞ無上道を惜む」「寧ろ身命を喪ふとも教を置さざれ」「身は軽く法は重し、身を死しても法を弘めよ」

諸君、當時のいはゆる儒者學匠、はたまた高僧碩徳は何をしてゐたか、禪の道元が永平の山寺に超世脱塵、猿鶴を相手として自ら高うし、念佛の親鸞が愚禿に甘んじ京都や北陸の田舎廻りをして彌陀陶酔を鼓吹し、眞言、律宗、乃至鎌倉五山の僧侶共が、虎の威を藉る狐の如く權勢に叩頭して衆愚に倣つてゐた時我が日蓮聖人は鎌倉街頭に佛法の大憲と尊王の大義とを絶叫したのである。思へ、彼等が所行は「これ一身を潔うせんと欲して大倫を紊る」ものに非るか、佛陀の大精神を忘却して世の蔭に眠るものに非るか、國事を雲烟霞眼鏡して逆賊に懐柔せられたるものに非るか、あゝ偉なる故、當時の怪沙門、佛子日蓮、臣子日蓮！しかも聖人は當時の國情甚だ非にして康元、正嘉、正元、文應と年を重ねるごとに天變地天頻りに起り飢饉疫病並び至つて國家の衰弊たゞならざるを見るや、去つて駿州岩本の実相寺なる經藏に入り、五度び一切經を精閲して、その過惡の根源を突きとめ、沈思默考意を決するや遂

に筆を揮つて、災難の由來と邪法の對治、國家經綸の大方策を論じて幕府に迫られたるものが即ち有名なる立正安國論であります、時に文應元年七月十六日、これが第一の國家諫論である、しかも此書に於て聖人は實に元寇の國難を豫言し、權勢に傲れる現下の國情を洞察するに、諷言あだかも符節を合するが如し、しかも佛法盛なるが如くして世はいよゝゝ亂れ、あまつさへ「御所請驗し無くして却つて凶惡を増長する」の狀、現證も文證、(經文)も、理證、(道理)も、皆ともに之有り、見よ連年しきりにうち續く災禍は、まさしく國家と教法の亂離衰退が「天地の鏡」に反映せるものなり、速かに正法を建立して國家を安らかにせよ、ます汝が大逆の行動を改めよ、速かに邪法を禁せよ、もし然らずんば今目前に見る三災七難の中残る所の「自界叛逆難」「他國侵迫難」の二必ず至らん。我れ敢て此の諫言を爲すは「此れ偏へに國士の恩を報せんが爲なり。」

むしろ却つてその折伏の銳鋒を憎みその勤王の誠忠を恐れ、陰に陽に彈壓を加へ、まづこの年八月當路者の尻押しする公然の秘密の下に暴徒を驅つて松葉ヶ谷の庵室を襲ひ夜陰に乗じて、聖人もろとも焼打しようとしたのであるが、不思議に難を免るゝや生き延びたるは不思議なりとて、いよゝゝ迫害を加へ遂に翌弘長元年伊豆に流すに至つた。しかもその時の罪名は何であつたか、「日蓮は天言を流布して人心を惑はし、事を佛法に寄せて政道を亂るものなり」といふのである。諸君、日蓮聖人は佛教革新の熱烈なる折伏傳道の爲に、六十一年の血涙の生涯、到る處民衆の法難迫害を受けたものではあるが、しかも幕府の武斷を以て公然と加へたる巨難大厄は、むしろ實に尊王愛國の言論と節持とが、事ここに至らしめたるものなりしことを知らねばならぬ。余りに烈しく勤王の大義を唱へたるが故に、或は焼打となり或は流罪となり或は斷頭場裡に引据えらるゝに至つたのである。

しかも聖人は伊豆に流されるや、まづ筆を執つて四恩鈔を草しこの法難のために第一には身を以て法華經を行住坐臥に讀み行する、いはゆる「色讀法華經」の眞の「法華經の行者」となりしことを思ひて佛祖の御前に佛子の責を一分にても盡しゐることを深く悦ぶと同時に、「第二に大なる歎きと申すは……身より汗を流し兩眼より涙を流す事雨の如し、我一人此國に生れて多くの人をして一生の惡業を造らしむる事を歎く」といふ深い宗教的感情を吐露されてゐるのであります。

否、諸君、更に感深きことは、聖人がかゝる流罪に値ひながらいよ／＼四恩を思つて感激されてゐることでありませう。即ち四恩鈔には「天の三光に身を温め地の五穀に神を養ふこと皆是れ國王の恩也、其上今度法華經を信じ今度生死を離るべき國主に値ひ奉れり、争か少分の怨に依つて疎かに思ひ奉るべきや」と、尊き信仰を思へば思ふほど、また尊き

つてをらるゝのであります、私達はこの御文章この御事蹟を考へます時、誠に親子の間の無限なる情に想ひ到りまして深き／＼感涙に咽ぶのであります。孝子日蓮はこの秋十一月信徒工藤吉隆の邸に至るの途、安房の國東條の小松原に於て、再び東條景信の邀撃に會ひ「數百人の念佛者等に待ちかけられ、射る矢は降る雨の如く打つ太刀は電のごとし、弟子一人は當座に打ち取られ、二人は大事の傷にて候、自身も斬られ打たれ結局は命に及びたりしが、いかゞ候ひけん打ちもらされて今まで生きて侍り、いよいよ法華經こそ信心まさり候へ」聖人この時馬上の景信と咫尺の間に見え、紫電一閃命風前の燭なる間一髮！太刀風鋭く斬りつけし景信は俄にドウと落馬して切先聖人の眉間をかすめ三寸の傷を負はしめたのであります。この時馳せつけし吉隆は、すはこそ一大事と防ぎ戦ひ遂に悲壯なる殉教の血潮に染まりつゝ、自らは死して聖人の御身を守つたのであります

國家を思へば思ふほど、法と國との大恩に感激せられてゐるのであります。かの先に記せし法然が讃岐流罪當時の心事と比べみて如何であらうか、……聖人はこの地に化を布くこと三年にして再び鎌倉に歸り來り益々正法を弘通せられた、その最中に慈母の病篤きを聞いて急ぎ故郷に還るや、殆どことされてゐられたのを見ては、聖人悲痛やるかたなく、さりながら如何にもして今一度母上に……と熱誠こめて釋尊に祈られたる所、赤誠感應致して漸く母上は息を吹き返された、しかのみならずその後實に四ヶ年の壽命を延ばされたのであります、この事は神秘的なる感應に屬する事でありませうが、聖人は自らこの事を富木殿の婦人に與へし「可延定業書」に記して教へ諭さるゝには、「當時の女人の、法華經を行じて定業を轉ずることは秋の稻米冬の菊花誰か驚くべき、されば日蓮慈母を祈りて候ひしかば現身に病を醫やすのみならず四ヶ年の壽命を延べたり」と言

た。聖人は厚くその菩提を弔はれ、往いて吉隆の妻に斷腸の思あるその悲みを慰めながら、諄々として慈教を垂れつゝ其の冥福を祈られたのであります。かくて聖人はこの房總の地に、慈母に孝事しつゝ法を弘め衆を導くこと四星霜、文永四年八月慈母つひに悲しくもみまからるゝや、佛子日蓮は親を思ふ孝子の哀情を傾け盡してねんごろに無上妙法の功德を回向しつゝ、厚くその菩提を祈りながら、三度鎌倉の地に法幢を進め、彌々國事を憂へ民人を警破し來つたのであります。然るに聖文永五年閏正月十八日、果然蒙古は我に使者を遣はして牒狀を寄越し來つた、日蓮聖人が立正安國論に豫言警告したる所はまさに九ヶ年の後に的中した。その文辭、表には穩かのやうに見ゆるもその底意は、「臣下の禮を取つて貢物を寄越せ、然らずんば汝が國を襲ふぞ」といふのである。極東の

神國に對して實に怪しからぬ言草である。朝廷、英邁の君、龜山天皇を始め、公卿朝臣の會議を開かれ又幕府も驚いてその策を練り始めたのである。國家は上下を擧げて動搖し來つた。聖人は今や迫り來れる國家の大事を目前に見て、再び徽を幕府並びに諸大寺等十一ヶ所に送り、宗義の得失を公場に決し、以て速かに正法を興立して國難を攘はんことを促されたのであります。これが有名な十一通御書である、これ實に立正安國論の精神の繼續であり、また再演である、その書狀には一々國家が大切である、而てまた人心を鍛へる所の教といふものが大切である、ケチな了見を以て一宗一派に拘泥してはいかぬ神聖なる教と眞正の國家を擁護する決心を鍛へ上げなければならぬといふ、護法愛國の至情を吐露して警告し催促せられてをる。

護する爲には、皆身命を的に懸けて掛らなければならぬ、殊に、幕府や諸宗に法の正邪を決せんことを迫つたのであるから、定めて今に迫害が來るであらう、然し少しも恐るゝな、卑怯未練の振舞あるな、我が日蓮の教は、禪、念佛の如き空觀に耽り亡國の悲歌に陥るやうな陰鬱退嬰的な宗教ではない、生氣ある活動を以て國家の爲に報ひるのであるから、先づ己れの生命を抛つことは初より覺悟すべき事である、しかも汝等は實にそれに依つて尊き菩提を成就せよ」といふ非常に強きまた悲壯崇高なる覺悟を促されてをるのであります。

# 法華經講話

(第二十講)

## 妙法蓮華經方便品第二 (其四)

小林 一郎

前回には、方便品の中で、舍利弗が釋尊に對つて説法を求めた、その偈の方の途中まで讀んで居つたのであります、その前に、方便品の初めの方に、釋尊が、佛の智慧といふものは到抵普通の人間の考へ及ぶところでないといふ仰せられた、その本當の意味は佛の智慧を讃歎へて、終にはお前達凡夫もだんだん修行して行けば此處まで來るのであるといふことを仰しやるつもりであつたやうでありますけれどもそれは聽いて居る人には能くわからない。たゞお釋迦様の仰しやる事を聽いて居りますと、なんだか佛

様が普通の人間とは別段のものだといふやうなことがかりを仰しやつたやうに聽えるものですからそこで大勢の者がそんなに佛と凡夫と異ふならば、自分達などは逆も佛様の心持がわかることはないだらう修行しても駄目ぢやないかといふやうな心持を起し易い。そこで舍利弗が、その大勢の心持を察して問を發した。智慧第一と言はれる舍利弗でありますから、衆の心持を察して、又お釋迦様が教をお説きになる御精神も大體斯ういふ所であらうかといふ察しを附けて、その中間に立つた譯です。まるでわからぬ凡夫と佛様との中間に立つて、兩方の意思の疏通を圖るとでも言ひますか、さういふやうなつもり



で疑問を發した譯であります。であるからこの疑問は舍利弗一人の疑問ではなくして、寧ろ大勢の人の總代のやうな意味で疑問を發した譯です。

その疑問を一通り述べて、重ねて偈を以て述べた中の「問ふこと無けれども而も自ら説きて、所行の道を稱歎したまふ」といふ所までを前回に讀んで居りました。誰もお尋ね申さなかつたけれども、佛様の方で、御自分で佛の境界といふものはどんなものだといふことをお説きになり、さうして佛様が永い間修行して覺りを開いたといふ、その間の大きなはたらきをお話になつた。それがあまり偉いことであるものだから、普通の人間にはチョット考へ及びもつかない事だといふのであります。

智慧甚だ微妙にして 諸佛の得たまへる所なり  
(智慧甚微妙 諸佛之所得)

佛様の智慧といふものは恐しく奥深いものであつて普通の人間にはなかく及びもつかない事であるけ

ウがつかかりしてしまつた。

其の緣覺を求むる者 比丘比丘尼

諸の天龍鬼神

相視て猶豫を懷き

(其求緣覺者 比丘比丘尼 諸天龍鬼神 及乾闥婆等 相視懷猶豫 瞻仰兩足尊)

「緣覺を求むる」といふのは、佛の教を耳に聴くばかりでなく、自分の毎日出會ふ事柄に依つて覺りを開いて、世間に執はれないやうな心持を起さうと思つて居る人人、その中には比丘、比丘尼といふ出家した男女もあるし、又人間ばかりではない、天上界のものも、龍とか鬼神とかいふやうなものもあり、或は乾闥婆といふやうな天上界に音楽を奏するものとかさういふものも、佛とお前達とはまるで段が違ふといふことを聽きますと、お互に顔を見合せてしまつて、なんだか譯がわからぬことになつてしまつた。「兩足尊」といふのは佛様のことで、たゞ佛様

れども、佛様であるならば譯でもさういふ智慧を得られるものだといふことである。

無漏の諸の羅漢 及び涅槃を求むる者

今皆疑網に墮しぬ 佛何が故ぞ是を説きたまふ

(無漏諸羅漢 及求涅槃者 今皆墮疑網 佛何故説是)

「無漏」といふのは煩惱の無くなつたこと、「羅漢」といふのは世間に執はれる心持が全く無くなつた者を言ひます。さういふ人々は、自分が心に迷ひがなくなり、苦悶が無くなるので、その迷ひが無く、苦悶が無くなつて行きさへすれば「涅槃を求むる者」で、それで本當の覺りが得られると思つて居つた。さういふ人々が今皆疑ひを發した。佛とお前達とは全く段が違ふといふやうなことを言はれたものであるから、折角今まで修行した事が役に立つのか立たないのかわからなくなつてしまつた。一體佛様は何故にそんな事を仰しやるのだらうと疑ひを發してモ

を仰ぎ瞻て、どういふ御趣意かわからないと思つてボンヤリして居りました。

是の事云何なるべき 願はくば佛爲に解説した

(是事爲云何 願佛爲解説)

「是の事」といふのは、佛様が、佛以外のものごまゝで段が違ふと仰しやつた、さういふ事はどういふ意味なのでありますか、願はくば佛様、吾々の爲にその深い意味を説き明して戴きたい。

諸の聲聞衆に於て 佛我を第一なりと説きたまふ

我今自ら智に於て 疑惑して了ること能はず  
爲めて是れ究竟の 爲めて是れ所行の道なりや  
法なりや

(於諸聲聞衆 佛説我第一 我今自於智 疑惑不能了 爲是究竟法 爲是所行道)

「聲聞」といふのは、佛の教を聽いて世の中の無常



を觀じて、世の中に執はれない心持を起した人、その大勢の中に於ては佛様が舍利弗を一番勝れたものと仰しやつた。舍利弗は智慧第一である、舍利弗より以上の者は無いといふことを今も言つて居らつしやる。所がその佛様に第一と認められた自分が、今自分の智慧だけではどうもわからなくなつてしまつた。「爲めて是れ究竟の法なりや」是れといふのは自分の今まで習つた事、その自分の今まで習つた事が究竟の法、即ち一番行止りの最も勝れた教として宜いか悪いかわからなくなつてしまつた。又自分の今まで實行した事が、それが佛の弟子として當然實行すべき道であつて、これより他に間違ひがないと心得て宜しいかどうかそれもわからなくなつてしまつた。

佛口所生子 合掌瞻仰して待ちたてまつる

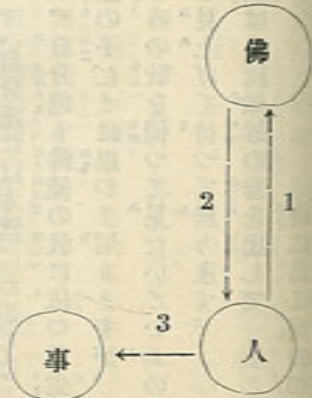
(佛口所生子 合掌瞻仰)

一體私共は、佛様の教に依つて生れ更つたと思つて

人間が佛様をお頼み申せば、佛様が直ぐ仕事に加勢して下さると思ふ。斯ういふやうな考をやめなければ、本當の信仰といふものは出来はしない。「商賈が繁昌しないから、どうぞ商賈を繁昌させて下さい」「頭が痛いから癒して下さい」「足が痛いから癒して下さい」「今年はどうも雨が降らないで穀物が出来なから雨を降して下さい」斯う言つて頼んで、その頼んだ通り佛様がやつて呉れるのだと思ふ、けれども、これが根本から間違ひなのです。佛といふものはそんなに請負師のやうなものではない、雨を降して呉れと言つたら雨を降せる、頭を癒して呉れと言つたら直ぐ癒して呉れる……そんなものではない。又そんな事が出来るものではない。數限り無いところの人の慾望を、一々相手になつて満足させるといふやうな事をやつて居られるものではない。これは極く淺はかな考であつて、本當の事を言へば

居る。佛様の口から生れた者だと思つて居る。これは佛教を信する者は、皆斯ういふ心持を起さなければならぬ。自分の體を生んだのは肉親の親達でありますけれども、生れたばかりの心は迷ひに満ちて居るのでありますから、その心持がモウ一遍生れ更る爲には、教といふものを聽かなければならぬです。それから身は親から生れたのでありますけれども、自分の心持は佛様の口から出た教に依つて生れ更つたのである。斯う思ふ。これが「佛口所生子」といふ意味である。

世間の考の淺い人から言ふと、人間が佛様をお頼み申すと、佛様が御利益を興へてその人間のやる仕事を助けて下さる。斯ういふやうに思つて居る。けれどもこの考をやめなければいけない。わかり易く圖で示すと



斯うなるのです。第一に吾々が佛様を信する、さうすると誠心を以て信すれば、佛様のお力が吾々の心にはたらいて、吾々の心持が前と異つたものになるそれが第二です。さうして前と異つた心持で仕事をやるから、前に出来なかつた事が出来るやうになる(第三)それが本當の御利益といふことなのです、自分が生れ更らなければ何にもなりはしない。自分が元の空阿彌で凡夫で居ながら、佛様が何とかして加勢をして呉れて仕事が出来行くだらうナンといふさういふ考は間違つて居るのである。

つまり吾々が佛教を學ぶといふことは、自分自身が生れ更なることである。それが出来なければ何にもなりはしない。「儲からないから儲けさせて呉れ」と言つて、縦ひ……そんなことは無いけれども、假に佛様が儲けさせて呉れたとしても、自分の心持がもとの空阿彌であるならば、その儲かつた富といふものは、決してその人を満足に幸福にするものではない。自分が病氣をして佛様に祈つて、假に病氣が癒つたところで、心もどの迷つた心であるならば、病氣が癒つても満足といふものはない。又他の不満が出て来る。他の迷ひが出て来る。ですから何と言つても根本は自分の心を建直すことであります。信するといふことは外ではない、自分の心をつくり直すといふことです。それが本當の信心といふことである。若しそれが出来なければ、信心といふことは根本から意味が無い。

「佛口所生の子」といふのはそれを言つて居るの

諸の天龍神等  
佛を求むる諸の菩薩  
又諸の萬億國の  
合掌し敬心を以て

其の數恒沙の如し  
大數八萬有り  
轉輪聖王の至れる  
具足の道を聞きたてまつらんと欲す

(願出微妙音一時爲如實說 諸天龍神等 其數如恒沙一求佛諸菩薩 大數有八萬一 又諸萬億國 轉輪聖王至 合掌以敬心一欲聞具足道)

どうぞ今仰しやつた事だけではわかりませぬから、モウ少し深く言つて戴きたい。「實の如く」といふのは、佛様が實際考へて居らつしやることを少しも包み隠すことなく、打明けてお話を下さい。諸の天上界のものや龍神といふやうなもの、その數は恒河の沙の數ほど多いものがあります。或は自分達も佛様の境界に行きたいと思つて菩薩の修行をして居る者その數も八萬といふ澤山の者があります。又萬億といふやうな澤山の國の轉輪聖王といふ、徳の高い王

である、佛様の口からお説きになつた教に依つて生れ更つた者となる、身は親に産んで貰つたけれども、心は初めからの心持では間違つて居つたのであるから、それを、佛の教を聽いて、新しい心持に造り成して、今迄と異つた意味で生きるやうになつて行く。斯うなつて初めて信心した效がある。佛の口から生れた者、即ち佛の口から説かれた教に依つて生れ更つた者、これが本當の佛のお弟子であります。

さういふやうな心持を有つて居るけれども、どうも今佛様の仰しやつたお言葉が、あまり懸け違つて居るので、自分達には本當にわからなくなつて来た、そこで、自分達も佛様の教に依つて生れ更つた、佛口所生の子だとは思つて居りますが、モウ一段奥深いところの教を伺つて見たいといふので、合掌して佛様を見上げて待つて居ります。

願はくは微妙の音を出して  
時に爲に實の如く説きたまへ

様も此處に澤山来て居りますが、斯ういふ者共が皆合掌して、誠心を以て具足の道を聞きたてまつらんと欲して居ります。具足の道といふのはモウこれより上は無い、これならば十分だ、これだけ修行して行けば必ず覺りが開けるといふやうな、その一番勝れた完全無缺な教を伺ひたいと思つて居ります。どうぞこの自分達の望みの心持をお察しになります、佛とお前達とは段違ひだなどとそんな事ばかり仰しやらないで、その佛の境界に到達するには如何にして宜しいかといふ、その道を示して戴きたい。斯ういふ願ひを起した譯であります。

教といふものはいろ／＼あります、對手の人間が善い事を考へて居るならば、その善い事を讃めて、倍々その方に進ませるといふことも一つの道です。併ながら又場合に依つては、そんな事では駄目だと突放して、さうして自分で考へさせて、考へて一生懸命になつた時に、又正しい道に引入れる、斯うい

ふ事も教の一つです。祖母さんが孫を可愛いがるやうに、やさしいやり方ばかりで行くものではない。時に依れば激しく言つて「駄目だぞ」と言ふのも一つの教である。駄目だぞと言はれば奮發しますから、それも一つの教である。今この場合がそれであります。お釋迦様が、お前達は駄目だ、逆も佛とお前達とは段違ひだと斯う言はれたから、どうもそれでは譯がわからなくなつてしまつた。駄目だと言つて突放されたのでは、今迄修行した効が無い。それでさう駄目だと仰しやらないで、まるで段が違ふといふその佛様の境界に、少しなりとも近づいて行く餘地は無いでせうか。若しさういふ事が出来るならお願ひ申したいと斯うなつて来た。そこで初めて佛様が突放した結果が現れて来た譯であります。けれどもまだいけぬ、舍利弗一人はそんな心持で居るだらうけれども、他の連中はまだ決心が足らないかも知れない。だから愈々衆が一生懸命になるま

では、モウ少し確りさせるやうにしなければいかぬといふ必要があるのでせう。それでお釋迦様は、舍利弗が一度お願ひしたわけではまだ許されぬ。

爾の時に佛舍利弗に告げたまはく、止みなん、止みなん、復た説くべからず。若し是の事を説かば、一切世間の諸天及び人、皆當に驚疑すべしと。

(爾時佛告舍利弗。止。止。不須復説。若説是事。一切世間。諸天及人。皆當驚疑。)

お前はそんな事を言ふけれども、駄目だ。説いたつて役に立ちはしない。是の事を説くならば、一切世間の天上界のものや人間界の者が皆驚いて疑つてしまふだらう。なか／＼衆が佛の本當の心に思つて居る事をいきなり信するといふことは出来ない。ウツカリ言はうものならば吃驚してしまつて、修行する勇氣が無くなるかも知れぬ。だからマア言はない方が宜いだらう。斯う仰しやつた。

舍利弗重ねて佛に白して言さく、世尊、唯だ願はくば之を説きたまへ、唯だ願はくば之を説きたまへ。所以は何ん、是の會の無數百千萬億阿僧祇の衆生は、曾て諸佛を見たてまつり、諸根猛利にして智慧明了なり。佛の所説を聞きたてまつらば則ち能く敬信せんと。

(舍利弗。重白佛言。世尊。唯願説之。唯願説之。所以者何。是會無數百千萬億。阿僧祇衆生。曾見諸佛。諸根猛利。智慧明了。聞佛所説。則能敬信。)

そこで舍利弗が又重ねて佛に申上げるには、世尊よ、どうぞこれをお説きになつて戴きたい。願はくば説いて戴きたい。何故舍利弗がこんな事をお願ひ申すかと云へば、此處に集つて居るところの數限り無い大勢の者共は、今急に佛の教を聴いたのではありませぬ。前の世からして已に佛の教を聴いて、佛の教に縁の有る者ばかりだと自分は思ひます。曾つていろ／＼な佛にお値ひ申して佛の教を聴いたことのある

る者が、又生れ更つてこれに來たものと思はれる。でありますからさういふ者は諸根猛利と言つて、機根が非常に勝れて居つて、どんな難しい事を聴いても辨へるだけの力がある。又智慧も明了と言つて、非常に明かだ、總てのものを徹底的に考へるだけのはたらきがある。斯ういふ者でありますから、佛様が本當に打明けてお説きになりましたならば、その佛のお説きになつた事を聴いて、これを敬ひ信じて、どんな困難な事があつても實行しようといふ勇氣を起すでありませう。斯う申して、どうぞ佛様が眞實の事をお説きになるやうにといふことをお願ひ申した。

爾の時に舍利弗重ねて此の義を宣べんと欲して佛を説きて言さく

法王無上尊。唯だ説きたまへ、願はくば慮したまふこと勿れ

是の會の無量の衆は。能く敬信すべき者有り

(爾時舍利弗 欲重宣此義一而說偈言  
法王無上尊 唯說願勿慮 是會無量衆 有能敬信  
者)

舍利弗が重ねて偈を説いて申すには、佛様は教を自在に説かれる方でありますから、教の王であります。又この上も無く尊い方であります。佛様よ、どうぞお説きになつて下さい。御心配無く心に信じて居らつしやる事をその儘説いて戴きたうございます。何故ならば此處に集つて居るところの澤山の人間といふものは、佛の教を聞いたならば皆敬つて實行される人々であります。どうぞこの人々に對して、そんなに懸念をなさないで、有體の事を説いて戴きたいと申しました。

佛復た、止みなん舍利弗。若し是の事を説かば、一切世間の天人阿脩羅皆當に驚疑すべし。増上慢の比丘は將に大坑に墜つべしと。

(佛復 止舍利弗 若説是事一切世間 天人阿脩

世尊が重ねて偈を説いて仰しやるには、自分の本當に覺つた所といふものは大變奥深いので、普通の人間が考へても考へ附かないやうな事である。それをウツカリ聞いたならば、増上慢の者は必ずその教を聞いて、敬ひ信せずして、「佛様もいゝ加減な事を仰しやる、佛様の仰しやることを實行が出来るものか」といふやうな淺ましい心持を起すやうになるだらう。だからいつそ言はない方が宜からう、斯う斷はられた。

けれども舍利弗はそんなことでひるむやうなものではありませぬから、重ねてお願い申上げた。

爾の時に舍利弗重ねて佛に白して言さく、世尊唯だ願はくば之を説きたまへ。唯だ願はくば之を説きたまへ。今此の會中の我が如き等比、百千萬億なるは、世々に已に會て佛に従ひて化を受けたり。此の如き人等、必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益する所多からんと。

三六  
釋 皆當驚疑 増上慢比丘 將墜於大坑

佛が復た仰しやるには、モウ止めよう、自分が若し是の事を説くならば、一切世間の天人、阿脩羅といふものは吃驚してしまつて、修行する勇氣を失ふかも知れない。又増上慢の比丘といふ、今までわからない癖にわかつたと思つて居るやうな人間は、大坑と言つて地獄に墜ちるやうになるだらう。地獄に墜ちるといふのは、佛の尊い教を疑ふやうになりますから、その疑つて罪をつくつた結果として、地獄に墜ちるやうになるかも知れない。だからウツカリ口を開かぬ方が宜いだらうと思ふ。斯う仰しやつた。

爾の時に世尊重ねて偈を説きて言はく  
止みなん、止みなん、説くべからず  
我が法は妙にして思ひ難し

諸の増上慢の者は 聞きて必ず敬信せじ。

(爾時世尊 重説偈言  
止止不須説 我法妙難思 諸増上慢者 聞必不敬信)

(爾時舍利弗 重白佛言 世尊 唯願説之 唯願説之 今此會中 如我等比 百千萬億 世世已曾 從佛受化 如此人等 必能敬信 長夜安穩 多所饒益)

マアさう仰しやらないでどうぞ佛様のお覺りになつた所を有體に説いて下さい。今此處に集まつて居るところの人の人間は、私共のやうな誠心を有つて居る者が百千萬億、澤山あります。斯ういふ人間は今急に佛のお弟子になつたものではありません。今迄の世に於て、前の世もその前の世も、幾度も佛に従つて教を聞いて居つた者であります。斯ういふ者は必ずや佛の教を信じて、それを信するならば長夜安穩、夜も晝もいつも心が安かであつて、さうして饒益する所多し、今迄は心に迷ひがあつても、その迷ひを除いて、又世の中の爲に役に立つやうにもなるでありますから、どうぞ説いて戴きたい。斯う繰返して申しました。

此法一則生大歡喜

爾の時に舍利弗重ねて此の義を宣へんと欲して  
 偈を説きて言さく、  
 無上兩足尊 願はくば第一の法を説きたまへ  
 我は爲れ佛の長子 唯だ分別して説くことを  
 なり  
 是の會の無量衆は 能く此の法を敬信せん  
 佛已に會て世々に 是の如き等を教化したま  
 へり

皆一心に合掌して 佛語を聽取せんと欲す  
 我等千二百 及び餘の佛を求むる者あり  
 願はくば此の衆の 唯だ分別して説くことを垂  
 爲の故に れたまへ

是等此の法を聞かば 則ち大歡喜を生ぜん  
 (爾時舍利弗 欲重宣此義 而説偈言  
 無上兩足尊 願説第一法 我爲佛長子 唯垂分別  
 説 是會無量衆 能敬信此法 佛已曾世世 教化  
 如是等 皆一心合掌 欲聽受佛語 我等千二百  
 及餘求佛者 願爲此衆 唯垂分別説 是等聞

いふのは二つのものが足りて居る。その二つのもの  
 といふのは福と慧で、福と智慧とが兩方完全だとい  
 ふので兩足と言ふ。福といふのはさいわひである。  
 普通の私共であれば心に迷ひがあつて、又いろい  
 ろ煩悶苦悶がありますから、不足も多いのでありま  
 すけれども、佛様となればモウ不足も無いし不満足  
 無い。いつでも満足して居らつしやる、これが福で  
 す。又満足して居らつしやるだけではない、智慧が  
 非常に勝れて居られるものですから、その智慧を以  
 て一切の人の境界を照し、さうして大勢の人間を救  
 ふところの道も能く辨へて居らつしやる。これが智  
 慧の方です。佛となれば——佛でなくても、佛の弟子  
 でも徳が高くなれば同じであります、自分一個人  
 としては何も不平もなければ不満足もありません。  
 何故ならば周圍の境遇に依つて動かされないのではあ

りますから、自分としては不平も不満足も無い。けれ  
 ども世の中の人間が皆苦しんだり、悩んだり、迷つ  
 たりして居るのを見ると、その爲には心を痛める。  
 だから自分としては満足だけれども、世間の人の爲  
 に非常に悲しむ痛んで、その迷つて居る人間を救は  
 うといふ爲には、どれほどでも骨を折る。それが佛  
 の境界です。それを言ふのであります。福慧といふ  
 のは、御自分としてはさいわひで満足だけれども、  
 世間の人間を見ると如何にも不憫に思ふから、智慧  
 の力を以てその大勢の人を救ふ道を考へて下さる。  
 それが福慧兩足です。

その福も智慧も具はつて居るところの佛様よ、願  
 はくば第一の法を説きたまへ。今まではいろ／＼の  
 教をお説きになつたけれども、一番勝れた教、即ち  
 佛様のお覺りになつた所をその儘打明けたところの  
 教を、どうぞ自分達の爲に説いて戴きたい。

「我は爲れ佛の長子なり、舍利弗は佛様のお弟子

の中で佛のお恵みを一番餘計受けて居る者で、丁度  
 子供で言へば長男のやうなものです、佛様は永い間  
 私を特別に愛して居て下さつた。その私の願ふこ  
 とでありますから、どうぞ分別して説くことを垂れ  
 たまへ、細かく説き分けて私共に教を與へて戴きた  
 い。

「是の會の無量の衆、」此處に居る大勢の人間と  
 いふものは若し佛様が本當に自分の心に思ふ事をお  
 説きになつたならば、そのお説きになつた所を敬ひ  
 信じて必ず實行するであります。佛様、あなたも  
 今茲で急にお弟子をお採りになつたのではないでせ  
 う。あなたも前の世から、モウ永い間大勢の教を求  
 めるところの、誠心を以て佛に歸依する人間を教へ  
 て、さうしてその人間を教化して居らつしやつたと  
 思ふ。だから今私共がこれほど熱心になつた以上  
 は、そんなにいつ迄も惜んで説かずに居らつしやる  
 筈はないと思ふ。

私共は皆一心に合掌して佛のお話を聴きまして、その聴いた事を必ず實行しようと思つて居ります。「聽受」とあります。この受の字は「受持」の意味であります。「受」といふのは成程尤もだと思ふこと、併し尤もだと思ふだけではいけない、その尤もだと思ふ信仰を持続けて、いつ迄もこれを變へないやうにしなければならぬ。それが「持」です。だから受と持となければ役に立たない。その受といふ方は信すれば出来る。信力に依つて受が出来る。それから念力に依つて持が出来る。佛様の教を信じて成程尤もだと思へば、受と言つてそれが自分の心に落着くのである。けれども一時は有難いと思つたつて暫く経つて忘れてしまへば何にもならないですからそこで念力と申して、その佛の教を信じた信仰を繰返し／＼考へて、いつでも忘れないやうにするといふことが念力であります。その念力がありますと初めて持と言つて、信じた、有難いと思つたその心持

を後までもズツト持續けて行くことが出来る。ですからいつでも信と念となければいかぬ。信は有難いと思ふこと、念はその有難いと思ふ心持を持続けること。信と念がありますと、受持といつてその教を自分のものとして、その自分のものとした事を行ひの上に現して、その行ひと教と一致することが出来る譯であります。だから受といふ字のあつた時にはいつでも受けるだけでなく、受持の両方がそこに含まれて居ると思ふことが大事であります。信するといふ時にはたゞ信するだけではない、信念であつてその信する所を後までも繰返し／＼考へて、その信が冷めないやうにすることが大事であります。どうも私共は感じ易い人間で、まア日本人全體がチヨツト感情的の人間であります、感じ易いといふことは又冷め易いものですから、冷めては何にもならぬ折角感じたならば冷めないやうにするといふ、これが大事です。それには幾度も／＼繰返し／＼考へな

いと、どうも凡夫の習ひでありまして、周囲の境遇がいろ／＼に變化しますと、折角信じた心持が冷めて參ります。

それを言ふのであります。「皆一心に合掌して佛語を聽受せんと欲す」私共は佛様の教を聴いて、それを心に信じて、確くそれをいつ迄も持つて行きたいと思ひます。所謂受持を得たいと思ひます。佛様の教を有難いと思ふならば決してそれを忘れないで自分達の行ひの上に現して行きたいといふことを考へて居ります。

「吾等千二百及び餘の佛を求むる者」自分も佛と同様になりたいといふことを求めて居る者が澤山あります。どうぞ願はくばその人間の爲に、分別して説いて戴きたい。サウ佛とお前達は異ふナンと言つて突放すやうなことを仰しやらないで、モット細かに説き分けて、自分達が捉へ得るやうに教を説いて戴きたいと思ひます。「是等此の法を聞かば」是等と

いふのは此處に居る者共、それが佛のお説きになる事を聴くならば、必ず大きな歡喜を生ずるでありませうから、斯う言つて舍利弗が二たび三たび繰返し／＼お願ひを申上げた。どうぞ佛様のお覺りになつた所を有體に説いて戴きたい。斯う願つたのであります。

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまはく、汝已に慇懃に三たび請じつ。豈に説かざることを得んや。汝今請に聽き、善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別し解説すべしと。

(爾時世尊 告舍利弗 汝已慇懃三請 豈得不説汝今請聽 善思念之 吾當爲汝 分別解説)

舍利弗の熱心がいよ／＼佛の心持に徹底したものですから、お前は繰返し／＼三度も同じ事を自分に望んだ、その様子を見ると本當に眞切な事が見える。それ程に望むならば「豈に説かざることを得んや」で、黙つては居られない。自分の覺つた所を有體に

話さう。又自分が今まで四十何年の間大勢の爲に説いたといふことはどういふ意味だか、それ等の事も打明けて話さう。斯うなつて参りました。これは舍利弗が自分一人の爲ではない、大勢の人に代つてお願ひを申したのであります、その誠心が佛様の御心に通じまして、それでは話さうといふことになつたのであります。

「汝今、諦に聽き、善く之を思念せよ」ハツキリと確かり聽け、自分の言ふ事は根本の大事な問題ナシだから、いゝ加減に聽いてはいけない。確かり聽け。さうして聽いたゞけではいけないから、後で又繰返し／＼自分で考へて、自分のものにするやうに努めるが宜しい。「吾當に汝が爲に分別し解説すべし」それでは一つお前の望みに従つて、今言つた事をモウ少し細かに分けて、お前達の心に確かり入るやうに説き分けて話さう。斯う仰しやつた。

此の話を説きたまふ時、會中に比丘、比丘尼、

をした、この傷を癒さなければならぬ。癒すのにはこの傷を石炭酸か、リゾールか、さういふやうなものを薄めた水でスツカリ洗つて、それからこれを綿帯して癒さなければならぬのであります、その洗ふのが痛い。それよりもこれに絆創膏かにか貼つて置くと、あまり痛い思ひをしなくて済む。だから弱虫な者は洗ふことを嫌ふ。折角絆創膏を貼つて痛みが止まつて居るのだからこの儘で行きたい。これを又剥いで痛い思ひをするのは嫌やだと思ふ。痛いのが嫌やだから一時的に貼つた膏薬を取ることをしない。取ることをしないから傷はいつ迄も癒りはしない。そこは思ひ切らなければいけない。折角膏薬を貼つたけれども剥けてしまつて、痛いけれどもリゾールか石炭酸で洗つて、さうして手當をすれば本當に傷が癒る、一時は痛いけれども、それが傷を癒す途だ。一時の痛いことぐらゐは我慢しなければいけない。

優婆塞、優婆夷五千人等有り。即ち座より起ちて、佛を禮して退きぬ。

(説此語二時 會中有比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 五千人等 即從座起 禮佛而退)

さう佛様が言はれた時に、そこに大勢集まつた比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四通りの弟子の中で、五千人ばかりの者が、その佛のお話を聽くと共に、サツと座より起ち上つて、佛に禮拜して出て行つてしまつた。これは餘程面白い事です。教を求めるといふ心持がなければならぬのであります、普通はそれが出来にくいのであります。今迄わかつて居つて、これで澤山だと思つて居る時に、それよりモツと上手の事を聽くと、今迄善いと思つた事が悪くなつてしまふから、これが惜しい。そこがいけない所です。恰度身に傷を負うて居るやうなものである。これから後にもその譬喩がありますが、例へば手の指に傷

それと同じ事です。私共は斯うやつて居れば無事に毎日を送れる。泥棒もしないで、人殺しもしないで、強請もしないで、斯うやつて居れば、どうやらこれで毎日無事に送れる。けれども唯斯うやつて居つたんでは一生涯は無意味である。そこで更に進んで佛の教を聽いて、心の迷ひを根本から除り去ることをしななければならぬのですが、これがやはり傷に觸るやうに痛いのです。自分の悪い所に氣が附くのですから、あまり快い氣持はしない。なんだか今迄これで一人前だと思つて居つた所が、だんだん聽いて來ると一人前でない、半人前でもない、いろ／＼間違ひが多いから……と思つた時には嫌やになる。そこを我慢しなければいけない、その我慢が出来ないで、今まで澤山だと思つて居る人はいつ迄經つても本當に覺れない人であります。兎に角人間が振返つて見て、本當の道に入らうといふことは骨の折れる事である。今迄の自分では満足でないか

ら、その今迄のはいけないといふことを考へて、一度自分で自分を叱つて、自分で自分を鞭つて、さうしてこれではならぬと思つて出直さなければならぬから、これは非常に骨の折れることである。その骨の折れることは普通の人は嫌やである。今迄で澤山だと思つて居る。それが此處に現れて居るのであります。五千人のお弟子は、これからお釋迦様が何か仰しやる、何か言はれては自分達はいけないものになりはしないかと恐れる、今まで自分達は相當な者だと思つて居つたから、若しつまらない者だと言はれた日には、今までの骨折はまるで減茶々々になつてしまふ。いつそ聴かないで此處を去つてしまふ方が宜からうといふので、座より起つてしまつた。

こんな事は能くあり得ることで、その所に奮發が大事なのですけれども、なか／＼その奮發が難しいのであります。それでその五千人の人は、佛様が愈本當の事をお説きになるといふ段になると、皆佛様に御挨拶を申上げてその座から退いてしまつた。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂へり。此の如き失あり。是を以て住せず。

(所以者何 此輩罪根深重 及増上慢 未得謂得 未證謂證 有如此失 是以不住)

何故その人々が其處を退いたかといふと、この輩は前の世からいろ／＼罪を犯した連中である。その罪を犯した跡が今も貽つて居つて、なか／＼無くならない。さうして増上慢、わからない癖にわかつたやうな心持をして居つて、「未だ得ざるを得たりと謂ひ」まだ本當に佛様のお心持を十分理解して居ないのだけれども、わかつたやうな心持になつて、「未だ證せざるを證せりと謂へり」まだ本當にさどつて居ないけれども、さどつたやうな気がして居る。さういふやうな缺點のある者でありますから「是を以て住せず」といふことである。吾々が物を説く場合でも、わからない時に幾ら側でやかましく言つてもわかりはしない、その時には放つて置けば宜い。暫く時を俟つといふと、だん／＼苦しんで、だん／＼惱んで、逆もいけなくなつて来て、又頼つて来るから、その時に捉へて本當の事を言へば、今度は身に泌みる。斯ういふ事もあるものです。たゞ優しくするばかりが本當の教ではない。時に依れば厳しく出て、まるで對手にならぬといふことも本當の教である。だから此處でお釋迦様が五千人の人間をまるで相手になさらないといふことは、慈悲が足りないのではない、それが本當の慈悲である。暫く勝手にさして、苦しませて、惱ませて、さうして目の醒めて来るのを待たうといふことでありまして、これが本當の慈悲であります。

て住せず」といつて、そこに住まつて居つて佛様の教を聴くだけの根気が無い。これから聴いたら自分達の悪い事がだん／＼わかつて来てつまらなくなるだらうと思つて、モウこの邊で止めようといふのでその座を起つてしまつたのであります。

世尊默然として制止したまはず。

(世尊默然 而不制止)

お釋迦様は黙つて見送つて、その起つて行く人間を「マア暫く待て」といふことを仰しやらなかつた。茲に教といふものゝ方法がある。教にはいろ／＼な途がある。説いてわかる人には説いた方が宜い。併し説いてわからない時には突放して、勝手に去らして置いて、それから苦んで惱んで、愈々堪らなくなつて又聴きに來た時分に説くといふことも一つの方法である。だからお釋迦様が茲で退座した者を止めなかつたといふことは、その人間を見放したことでない。暫く苦勞をさして、目の醒めるまで待つて

よく世間の俗語に「縁無き家生は度し難し」とい



ふ言葉があつて、縁の無い者は逆も救へないとお釋迦様が仰しやつたと言つて居りますが、お經の中にはそんな言葉は無い。いろ／＼なお經の中の言葉を彼此れと綜合して考へて見ると、それに近い事は仰しやつてある。縁の無い衆生は度し難しといふことは、縁の無い者は一人も無いといふことである。そこを間違へてはいけない。若し縁の無い者があればそれは救へないのだけれども、併し縁の無い者は一人も無いから、結局皆救つてやる。斯ういふことではありません。縁はいろ／＼ある。何故ならば、佛様の教は有難いと思つて歸依する者も縁がある。佛様の教は逆も駄目だと思つて居る者も、自分勝手にやつて居るとどうも行かないから、又後で後悔する者もある。後悔すれば又頼つて来る。だから佛様の眼から御覽になれば、縁の無い人間といふものは一人も無い譯です。たゞその縁が今すぐ結付くか、暫く経つて来るか、一度離れて又結びつくか。それはマア

その人の境遇事情に依つて異ふのでありますけれども、結局は總ての者が、皆佛の教に依つて救はれない者は一人も無いといふことを、佛はスツカリ見極めて居らつしやる。だから佛法に縁の無い者は結局無いのである、たゞ一時はそれは縁が無くなる者もある、それは一時は救へないけれども、まるで縁が切れたのではない。他日又たよつて来るだらう。その時に救つてやらう。斯ういふ意味です。今茲で五千人の人間が座を起つといふことを許されたのでありますが、これはだん／＼本文を讀んで見るとわかりませんが、後になつてお弟子達に、「今此處に居る者は自分の言つた事がわかつたらうから、此處に居ない者でもお前達から又傳へてやつて、わかる時が来るだらう」と仰しやつて居ります。さういふ風に、決して佛は一人の人間でも、突放して救はないでその儘に措かうといふ考は無。機會を失つて居られる。今此處に居る者がわかつたならば、

此處に居ない者でも後で眼が醒めて来て、教を求めて来るだらうから、その時はお前達がこれを隔てないで、仲間にしてやつて、さうして一緒にこの佛の尊い教を實行するやうにしてやつて呉れといふことを仰しやつて居る。洵にこれは尊いお心持であります。さういふ譯でありますから、一時突放されたといふことは結局大きな慈悲心の現れであると考へなければならぬ。

して居る。丁度大きな樹で言へば細い枝だの、小さい葉のやうなものである。マアあの者はあの者として暫く差措いて、あの人々が居なくなつた餘の人間は、モウ枝葉のやうなものではなくて「純ら眞實のみあり」洵に、誠心があつて、眞實の心持の者だけだから、この人々の爲にそれでは本當の自分の心持を打ち明けよう。

爾の時に佛舍利弗に告げたまはく、我が今此の衆は復た枝葉無く、純眞實のみ有り。舍利弗、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し、汝今善く聽け、當に汝が爲に説くべしと。

(爾時佛告舍利弗。我今此衆。無復枝葉。純有眞實。舍利弗。如是増上慢人。退亦佳矣。汝今善聽。當爲汝説。)

あの五千人の人間は行つてしまつたが、あれはまだどうも根本の事がわからないで、つまらない考を起

「舍利弗よ、是の如き増上慢の人は退くも亦佳し」いつそのあの連中が居なくなつて宜いやないか、氣にするな、あの人間はあの人間で又他日教を求めて來ることあらう、慌てゝ説いても仕方がない、姑くその儘にして置かう。残つたお前達は自分の眞實の心持を聴きたいといふ誠心を有つて居る者だから一生懸命で聴くが宜しい。「當に汝が爲に説くべし」お前達の爲に自分の心に思ふ事を有體に説いてやらう。斯う仰しやつた。

舍利弗の言さく、唯然、世尊、願樂はくば聞き

たてまつらんと欲すと。

(舍利弗言 唯然 世尊 願樂欲聞)

そこで舍利弗は、その言葉を感じて非常に感激して申すには、私共は喜んで佛の教を伺ひたいと思つて居ります。どうぞお説きになつて戴きたいと申上げました。

佛 舍利弗に告げたまはく、是の如き妙法は、諸佛如來時に乃し之を説きたまふ。優曇鉢華の時に一たび現するが如きのみ。

(佛告舍利弗 如是妙法 諸佛如來 時乃説之 如優曇鉢華 時一現二耳)

これから言ふやうな妙法、非常に勝れた、今まで曾つて説いたことの無いやうな斯ういふ勝れた教といふものは、自分ばかりではない、諸佛如來、あらゆる佛様が説く所は即ちこれを説きたまふもので、無暗に説きはしない。説くべき時機が來た時にのみ初めてこれをお説きになるのである。チョウド優曇鉢

華といふ華が、毎年々々咲くのではない、何百年か何千年かに一度、咲くべき時機が來た時にはじめて華が咲くと同じやうに、佛が眞實の教を説くといふ機會はさうやたらには無いと言はれる。

舍利弗、汝等當に信すべし、佛の諸説は言虛妄ならず。

(舍利弗 等當信佛之所説 言不虛妄)

だから舍利弗よ、お前達は本當に心から信じなければいけない。佛の説く所は一言も虚妄ならずい、加減な事を言ふのではない。佛の心の底に信じて居る事を言ふのだから、ウツカリ聴いてはいけないぞ。

舍利弗、諸佛の隨宜の説法は意趣解り難し、所以は何ん。我無數の方便、種々の因縁、譬諭、言辭を以て諸法を演説す。

(舍利弗 諸佛隨宜説法 意趣難解 所以者何 我以無數方便 種種因縁 譬諭言辭 演説諸法)

れる。

是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯だ諸法のみに有して乃し能く之を知しめせり。

(是法非思量分別之所能解 唯有諸佛乃能知之)

思量分別といふのは、あれは斯うだ、これは斯うだと考へ別けることです。考へ別けるだけでは本當の事はわからない。

これはチョットお經を離れて、西洋の言葉を使ふとわかり易いと思ひますが、人間の知識といふものはどんなものであるかといふと、一番初めに起るものは感覺であります。これが人間の知識の中で一番簡單な知識です。感覺といふのは眼で色を見るとか耳で聲を聴くとか、口で甘い辛いといふやうなことを知る、それが感覺です。これはどんな赤ん坊でもわかる。火にあたれば温いと思ふ、氷に觸れば冷たいと思ふ。それが感覺であります、所がその感覺

「諸佛隨宜の説法」佛は平生は相手に依つて教を説く。相手がつまらない者であるのに、自分の心に深く信する事を説いたつてわかりはしないから、平生は宜しきに随つて説くのである。向ふの力に應じて智慧の無い者は無いやうに、有る者は有るやうに、子供は子供のやうに、老人は老人のやうに、その宜しきに随つて説くのですが、その説く所が何を目的にして説かれるかといふことは他の人間にはわからない。佛様のやうな智慧の有るものは、「あの人間にはこれが良い」「この人間にはこれが良い」と、見當をつけて説かれるけれども、何を目的にしてあといふ事をお説きになるかといふことは、普通の人間にはわからない。何故ならば、佛といふものは數限りのないところの方便、また種々な因縁、事實を例として説くこと、それから譬諭、すなはちたとへまたいろ／＼來の心持にしつかり當はまるやうな言辭、ことばを以て法を説かれるからである、と言は

だけでは人間の知識は幼稚なものであります。暫く経ちますと判断といふことをやつて来る。判断といふのは、あれは斯うだ、これは斯うだと物の關係を知ることを、斯うなると知識が餘程進みます。譬へて言ひますと、赤ん坊がどうかして熱いお湯の中に手を突込んだ。熱いので思はず泣出したとする。その時の状態は感覚で、何もわかりはしない。なんだから手に大變な感じがしたからワツと泣き出した。所が二歳になり三歳になりして行きますと、「この間感じた感じは熱いといふ感じだ」といふことがわかる。初めてお湯に手を突込んだだけではわかりませぬけれども、それに似たやうな事を幾らも経験する炬燵にあたりたり、火にあたりれば温い、日向ぼつこをすれば暖いから、さういふ事を重ねて、「この間手を突込んだ時の感じは熱いといふものだ」といふことがわかる。それから手を突込んだものはその時にはわからなかつたけれども、それから後に身を洗

つて貰つたり、頭を洗つて貰つたり、或る時は飲まされたりしたので、それはお湯だといふことがわかる。そこで、初めて、手を突込んだ時にはなんだからわからなかつたけれども、だん／＼経験を積む間に手を突込んだのはお湯といふもので、その時受けたことは熱いといふ事だといふことがわかりましたから、これを結つけて「湯は熱い」といふことがわかる。これが判断であります。だから初めはたゞ感覚でありませんが、この感覚がだん／＼重なつて行く間に判断になつて来る。なんだから夢中で飛上つたのが後になればあれは湯といふものだ、さうして熱いといふことだとわかる。

田舎の人が初めて東京へやつて来て、東京驛に着いて、友達に迎へられて自動車に乗せられて銀座通りなどを歩いた時には、何が何だか譯がわかりはしない、なんだか知らんが、あつちにもこつちにも車が疾つて居つて、燈火がキラ／＼して居つて譯がわ

からない。それから東京に暫く落着いて見ると、いつか通つた所はあれは銀座といふ所だナ、さうして賑かな所だナと思ふ。さうするとこれは判断といふことになつて、「銀座は賑かだ」といふことになる。初め見たゞけではわからない、幾度も／＼さういふ経験を積むと、さういふ判断が出来て来る。だから初めの知識は感覚であつて、それから暫く経つと、あれは斯うだ、これは斯うだといふ判断をするやうになります。斯うなると餘程進む譯です。

それからモット進みますと、今度は推理をするといふことになる。推理といふのはいろ／＼判断をした結果、これが斯うであつたから斯うだといふ風に今まで自分の知つた事に依つて、先の事までも推し量ることになつて来る。これが所謂推理といふことである。譬へて言へば、七月になつて梅雨が霽れるのが普通だ、所が前の例に依ると、梅雨の間に降らないと後で降ることがあるといふことを知つて居る

から、今年梅雨に降らなかつた。これから七月になつて降るだらうナと思ふ。さういふ事が推理です。今迄の経験を本にして、これから後に起りさうな事を推し量る。斯ういふはたらきです。

それが普通の人間の知識といふものは、詳しく言へば際限がないが、大體この三段です。單なる感覚と、それからそれを結つけて判断すること、それから今までの経験を本にしてこれから後を推し量るといふのが、普通の知識です。これは併し智慧の有る人無い人、教育の有る人無い人に依つて違ひますけれども、大體別ければ人間の知識といふものはこれだけである。けれどもそのどれにしたところが、佛様とか、神様とか、天地萬物を司るところの根本のものは何だといふやうなことは、これではわからない。いろ／＼考へて来ると何かありさうだとは思ふ。どうも風が吹いても出鱈目に吹くのではない。雨が降つても無暗に降るのではないから、なにか天地萬

物を司るところの大きな力がありさうだとは思ふがたゞ「ありさうだ」と言ふだけであつて、何物だかしつかり解らない。英吉利のスペンサーといふ哲學者は、これを「不可知者」(Unknowable)と言つて居りますが、それは正直に言つた言葉であります。實際吾々が日常出會ふところの事柄に就て考へて見ると、何かありさうだ、人間が出鱈目に生れて來たのでもなからう、天地萬物が無意味に存在するのでもないから、そこに何かあるだらうとは思ふが、何かあるだらう切りで、それから先へ行かない。スペンサーの言つた知るべからざるものになる。その知るべからざるものを「これだナ」と捉へるといふことは、それは信念の力であります。そこに信ずるといふことの力がある。たゞ理窟ばかりでは、「なんだかありさうだ」でそれつ切りですが、そこにその何物かを確りと捉へて、「確に斯ういふものがある」と思ふといふと、人間の心に大きな力が出て來る、頼

みが出て來ます。それは感覺でも、判斷でも、推理でもいけない。さうなると、斯ういふことを本にして、それから進んで何か一つの物を確かりと信ずる所謂信力といふものになる。そこで初めて本當のものが捉るのであります。

それでありますから、一つのを信ずるといふ力の無い人は、一生涯どんなに學問をしても、「何かありさうだナ」でお終ひです。科學者などは「エナジー」といふことを言ひますが、エナジーといふのは何物だか解らない、たゞ「何か大きな力がありさうだナ」……それでお終ひです。それから、そんな事も考へない普通の人はどうするかといふと、前に言つたやうな感覺、判斷、それから推理といふ風にやつて、それぎり哲學も科學も宗教もナニもやらないで済ます人は、その何ものかといふものを運命だと思ふのです、例へば、朝、「今日は雨が降りさうだナ」と思つて傘を持つて出た、ところが降らない。「降ら

ないだらう」と思つて傘を持たずに出たら降られた「今日は運が悪い」と言ふ。さういふ風に、信ずる力を以てしつかりと捉へることの出來ない人は、運といふもので諦めてしまふ。大概さうでせう、信仰も宗教もナニも無い人は、運命と思つてしまふ。運といふことはまア誰でも考へます、運が良いとか、運が悪いとか……それで済ましてしまふ。往來で轉んで墓口を落した……これは運が悪い。轉んだら前に墓口が落ちて居つてそれを拾つて起きた……これは運が良い。運の好い人の真似をしてモウ一遍轉んでも落ちては居ない……やはり運が悪い。斯ういふやうな譯で、普通は運といふことで済ましてしまふ年の若い時にはそんな事も考へませぬけれども、だん／＼年を取つて、四十歳になり、五十歳になり、自分の思ふ通りに行かない世の中だといふことを考へますと、「どうも世の中は運次第だ、今更どう考へても仕様がなない」ナンと言つて大概諦めてしまふ

吾々共のやうに頭に白髪が生えたり、頭の眞ん中の鏡が良くなつたりして來ると、「世の中は運だナ」と諦める。さうしてそれを悟りだと思ふ。けれども悟りでもなんでも無い。それは要するに疲れてしまつたのです。大概の人はさうナンです。あれこれと騒いで、いろ／＼先の事を考へたりするけれども、その考へることが皆外れるものだから、「要するに人間は運次第だ、今更ジタバタ騒いでも仕様がなない」斯う諦めてしまつて、それで「俺もこの頃は悟つた」ナンと言つて居るけれども、悟つたのでもなんでも無い。それは要するにガツカッしてしまつたのです。それではいかぬといふので、この教といふものに依つて、なにか、人間は勿論、天地萬物を支配する一つの大きなものを捉へることを考へる。それが所謂信する力といふものであります。信する力が無ければそれはモウ仕様がなない、たゞいゝ加減に考へて居れば、結局運だナと言つて諦めるぐらゐのもので

す。その事を此處で言つて居ります。

思量分別だけではないけないのだ。たゞあれがあつたの、これが斯うだと考へて見たつて、毎日経験することを比べ合せて考へるといふやうな、そんな事だけでは逆も「能く解する所に非ず」で、わかりはしない。これは佛の教を聞いて、さうして佛といふものは大きな力のあるものだといふことを確り信ずると、茲に至つて初めてさういふ事が解けるのであつて、さもなければわかりはしない。「たゞ諸佛のみ有して乃し能く之を知しめせり」佛といふやうな本當に覺つた方があつて、初めて根本の總てのものがどんな理法に依つて立ち行くものであるか、如何なる道が行はれて居るか、如何なる力が天地萬有を支配するものであるかといふことが本當にわかる

所以は何ん、諸佛世尊は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。

(所以者何 諸佛世尊 唯以一大事因縁故 出現於世)

ない着物を着て居る人は、綺麗な着物を着ることが一大事だと思ふだらうけれども、その綺麗な着物を着て道を歩いて、夕立に遭つて濡れれば、綺麗な着物はモウ汚なくなつてしまふ。さうして見ると着物を着るといふことも一大事ではない。腹が減つて居る時には、食ふことが一大事と思ふけれども、併し一度食つたら永久に腹が張る譯ではない。暫く経てば又減つてしまふから、飯を食ふといふこともそんなに一大事ではない。年の若い人は、顔の綺麗な事を一大事だと思つて、美顔術をやつたり、鍔を掛けて頭髪を縮らせて見たり、いろ／＼憂身をやつして居るけれども、併しどんなに綺麗にしたつて、二十代の人が三十歳になり、四十歳になれば、顔には皺が出来て色が悪くなり、結局皺苦茶になつてしまふさうすると顔を綺麗にすることも一大事ではないといふことになる。

然らば一大事とは何であるか。人間が生きて居る

何故そんな事を言ふか。茲で初めて佛の世に出て教を説かれた目的をハッキリ言ひ表はされて居る。佛は何の爲に世の中に出たのであるか、それは「一大事の因縁」といふ、人間に取つて何より大事な、最も大事なることを衆に教へようと思つて、その目的を以て世の中に出て來たのだ。斯う言はれるのであります。

一大事といふものはさう矢鱈にありはしません、人間の世の中で大事だと思つて居る事の大部分は、そんなに大事な事ではないのです。人に依つてこれが大事だと思つて居る事があるけれども、果してそれが大事かどうかわからない。貧乏な人は、金があれば宜いと思つて、金を儲けることを一大事だと思つて居る。併し金を儲けた人が皆幸福かといふと、さうではない。儲けた人でも不幸な人もある。さうして見ると金儲けといふことが一大事ではない。汚

のは何故に生きて居るかといふ、その事を本當に辨へ、その事を知るといふこと、これが一大事でないならばならぬ。お互ひは生きて居るのだから、何故生きて居るかかわからないで生きて居るといふ、そんな情けないことはない。それだから何故に生きて居るか、生きるといふことは如何なる意味であるか、生きることを續けることがどれだけの役に立つかといふ、つまり生きることの眞の意味を知るといふことが一大事だ。それがわかるならば、實際は他の事はどつちでも宜い事ナンです。ところがその一大事を考へることをしないで、それより二番目、三番目の事ばかりを考へて居る。それだから結局行き詰つてしまふ。

私は始終考へるのですが、この前青山に居つた頃には二階に寝て居つた。今の私の家は二階はありませぬが、以前二階に寝て居つた。ところが私はよく朝寝をする。夜一時、二時まで書き物などをす

るものですから、朝はつい朝寝をする。眼が開いて見るとモウ八時半だといふやうなことがある。冬はさうでもないけれども、夏は八時半に眼が開いた日には大變です。陽がカン／＼あつて居る。これは大變だ、寝過ぎたナと思つて慌て、兩戸を開ける。一枚開けて見るとモウ隣り、近所が皆起きて居るからさきまりが悪いと思つて、急いで兩戸を開ける。さうすると終ひの戸が入らなくなる。あまり慌て、初めの戸を確り戸袋に押附けないで、いゝ加減に入れる。だから終ひにそれがどうしても入りはしない押たつて引たつて入らない。壊れても入りはしない仕様がなから又モウ一遍それをスツカリ閉めて、それから今度は一番初めの戸を後ろへビタリと押し附けて、それから二枚、三枚と開けて見ると、終ひの戸がスラ／＼と入る。斯ういふ経験を、私は幾度もしたのであります。何と言つても一番初めの事が大事である。一番初めの戸をいゝ加減にして置いて

二枚目、三枚目の戸をギチバタやつたところが入りはしない。  
それと同じ事で、人間生きるにしても何故に生きるか、生きる價值は何だといふことが一番初めの問題である。その一番初めの問題をいゝ加減にして置いて、二番目、三番目の問題を捉へて、どうしたら金が儲かるか、どうしたら地位が得られるか、どうしたら威張れるか、さういふ事はかりやつて居る。だから結局ギチバタしてわからなくなつてしまふ。だから逆も仕方がない。その中に疲れてしまつて、前に言ふやうに諦めてしまふ。それでは駄目です。一番初めの戸を確りやらなければいけない。その一番初めの問題とは何だと言へば、それが所謂一大事です。人間何しに生きて居るか、生きるといふことの本當の意味は何だ、どういふ風の心持を以て生きたら生き甲斐のあるやうになるかといふことであるこれが一番大事です。

「一大事の因縁を以て」さういふことを衆の人に知らせたいといふ望みを有つて、さういふ縁故を以て佛はこの世の中に出て來たのである。だから佛様の一生涯にお説きになつた事がどれほど難しい事もあり、優しい事もあり、結局はそれです、ですから佛様のお説きになつた事は結局一つになつてしまふ。相手に依つて深く説いたり、深く説いたり難しく説いたり、易しく説いたりするけれども、結局は何しに生きて居るのだ。人生の本當の意味は何だ。人間の存在といふことは何を意味するか、斯ういふ事を教へるのがそれが目的ナンであつて、一代五十年の説法といふものは、その目的に適ふやうに説かれたのである。

だから佛の教といふものを學ぶ時に、どんな浅い教でも、結局は深い所にやつて來るのだといふことを考へなければいけない。私共がお經を讀んで見ても、いつでもさう思ふ。非常に淺い子供に説くやうな

事を説いて居られるけれども、その子供に説くやうな事を能く味はつて見ると、大人が考へても考へ附かないやうな難しい理窟がその中に含まれて居る。佛様の教といふものは、どんなに苟且に説かれた事でも、それが非常に深い意味を有つて居るものであつて、これを味つて深く／＼入つて行けば、結局人生は何を意味するか、すべての物が存在するのは何の目的かといふ所まで行くものである。それをそこ迄深入りしないで表面だけ考へて居れば、極めて淺いものになつてしまふ。吾々が佛の教を學ぶ時にはいつでもそこに氣を附けなければいけない。淺く見れば淺い。それは教が淺いのではない。こつちの觀方が淺いから、表面だけで以て深い意味がわからな

い。斯ういふ事を考へなければいけない。  
これは私がよく人に話して笑ふことですが、數年前に日光の中禪寺に滞在して居つた。所が中禪寺の向ふ、二、三里の所に湯の湖といふ湖水がありま

す。そこに友達が居りまして、そこから使を寄こして、「来ないか」と言つて来た。それは大分人数も大勢で、大變贅澤な様子で滞在して居るらしい。私はその行けば御馳走にもなれれば、ゆつくり話も出来ると思つて、早速行つて見ようと思ひました。少し贅澤な事でありましたが、今すぐ来ないか、晝飯を一緒に食ひたいといふものでありますから、中禪寺で自動車を借つて貰つて、十一時過ぎに中禪寺を出掛けました。腹が減つて居つたけれども、向ふへ行けば御馳走になれると思つて我慢して自動車を乗つた。だん／＼腹が減つて来る。早く行きたいと思つて、運轉手に「早くやつて来れ」と頼んで、飛ぶやうに走つてすぐに湯の湖に着きました。それからその友達の家に行つてゆつくり話をし、御馳走になつたりして一晩泊りまして、翌朝もとの中禪寺へ歸つて来ました。今度は歩いて来た、「ナーニ一日中掛つてもかまはないからゆつくり行かう」と思つて

行くと一つ／＼の花が皆美しい。すべての事がそれである。いゝ加減に表面だけ見て居たのでは、物の本當の事はわかりはしない、一つ／＼に就いて深く味つてこそ本當の價值がわかる。だから佛様の教といふものも、畢竟するに一大事の因縁、人生の本當の意味を教へようといふのでありますけれども、その教へようといふ心持がわかるのには、自分が落着いて深くこれを味はうといふことをしなければならぬ。たゞ表面だけを見て「そんな所はなんだか譯がわからぬ」と言つて飛ばして行つたならば、本當の所がわかるものではない。その事を茲に言つて居る。佛様は一大事の因縁の爲に世に出た。だから佛の説く事は皆この人生の一大事を説き明かす爲に役に立つて居るのだ。そこを考へなければいけない。斯う仰しやつて居るのであります。だから吾々は、佛は一大事の因縁の爲に世に出たのだといふことを忘れてはならない。佛はすべての人

朝九時頃に向ふを出てブラ／＼歩いて、二、三里の所を四五時間掛つて中禪寺まで来ました。

その時にブラ／＼歩いて見ると、あの中禪寺と湯の湖の間の途中といふものは、如何にも美しい。八月の末でありましたが、モウ秋草が一パイ咲いて居る。女郎花もあれば龍膽もあれば萩もある。實に美しいものです。それを見ながら、「ア、此處にも萩が咲いて居る」「龍膽は綺麗だな」「女郎花も綺麗だな」と思つて、實に快い氣持で中禪寺まで来ました。さうして考へて見ると、往きはここの美しい花を一つも見なかつた。たゞ早く行つて晝飯の御馳走にならうと思つて、その事ばかりを考へて自動車を無茶苦茶に急がしてしまつて、あの綺麗な秋草を一つも見ないで通つた。歸り懸けにはゆつくり来たのでそれを見ることが出来た。その時に私はツク／＼思つた。人生の事はこれなんだ。急いでサツト通つたのでは、花も何も眼に着きはしない。ゆつくり見て

に一番深い、一番根本の問題に就いての教を與へて人々をして生きる效のあるやうにして生きさせたいといふ、この一大事の爲に世に出たのであるから、人々もそのつもりで佛の教を聴かなければならぬのであります。

これはお互ひが信仰を決定する上に極めて大事な一つの條件でありまして、これからお互ひに法華經を讀んで参ります、又機會に依れば掌を合せて佛様を拜むといふやうな、さういふ儀式もやつても宜いと思ひますけれども、その本を讀むとか、講釋をするとか、議論をするとか、佛を禮拜するとかいふことそのその根本の意味は何だといふことを考へないで、「なんだか知らんが佛様を拜んだら御利益があるだらう……」ぐらゐでやつて居つたんではいけないのです。何故なら、佛は一大事の因縁の爲に出たのだといふ、佛は衆に拜まれないと思つて出たのでもない、衆に威張りたと思つて出たのでもない。

一大事の爲である。人間の本當の意味を知らせる爲に世の中に出たのであると、佛様が名乗つて居らつしやるのでありますから、吾々は佛の教を聴いたり、佛を禮拜する時には、この一大事を知りたいたい、熱心を有たなければいけない。人間は何しに生きて居るのだ、人生の有ゆる事が如何なる意味を有つのだ、この一大事を知りたいたい、熱心がなければ、お経を讀んだつて、題目を唱へたつて、佛を禮拜したつて、それはつまらない一種の遊戯であります。少し言ひ過ぎるやうだけれども遊戯です。慰みのやうなことではいけない。世間を見ると、慰みにやつて居る人が少くない。坐禪をする、お経を讀む、佛教の話の聴く、「何しに聴くのであるか、何しに坐禪するのであるか。」「暇だからやつて見る……」それではつまらない。それは骨董を弄ぶと同じ心持である、それは遊戯である。それでいろいろな言葉を覚えて、「いや、何といふお経に斯うある。何の本に斯

うある」といふやうな事を言つても、そんな事はつまらない、相當價値はあるかも知れませぬけれども、さういふ言葉を覚えて、慰みに自分の飾りにするやうな考であるならば、それは佛の教を學んだ効が無いのである。

さういふのを一切戯論と言ふ。戯論ではいけない。ところが大概は戯論で終る。戯といふのは無責任といふことで、無責任な講論、自分が實際出来るか出来ないかわからないのに、議論だけやつて見る。果して人生に今實行して出来るか出来ないかわからぬけれども、文句だけ覚えて列べて見るといふならば、それは戯論であります。極めて無責任な、戯れに近い理窟であります。それではいけない。斯ういふやうに皆様がお集りになつて、私がお話して居りましたも、これが戯論で終つたならばつまらない、ただ時間潰しであります。どうか習つた事はその片端でも實行して、實際に行つて、つまり人生の意味を離

りと捉へて、一日でも宜いから生きる効のある生き方をして「この世の中に生れた効があつたナ」と思ふ、そこまで溜ぎつけないければつまらぬ話である。それをやらないうでただ、徒に經典を讀んだり、いろいろな事をやつてもそれは戯論である。戯論して居る間は本當の覺ちやない。

だから前にも申したやうに、涅槃經の中には「戲論永く斷ゆるを名けて涅槃と爲す」と言つてゐる。涅槃は「さとり」といふことであります、無責任な議論が無くなつた所が覺りである。文句を言つたり、理窟を捏ねたりして居る間はまだ駄目ナンで、その習つた理窟が一々實行されて、自分がやつて見ると「成程こゝだナ」といふことがわかる。自分が實行して見て、無責任な議論や無責任な研究でなくその無責任な研究、議論が無くなつてしまつて、眞實の教を信じてそれを實行するといふことになつた時、それを名けて涅槃と言つてありますが、尚にそ

の通りであります。私共のお話などもどうか戯論といふことを離れて、自分の習つた事を自分が實行して、さうして人間といふものゝ存在の意味をスツカリ明かにして、生きるらしく生きるといふ風の心持になつて行きたいと思ひます。そこが所謂涅槃といふことでせう。この言葉は忘れてはならないと思ひます。少し亂暴な事を言ふやうですが、今まで佛教が我國に勢力を有たないといふことは、要するに戯論が多かつたからだと思ふ。いろいろ話をして、いろいろ本を讀んで、いろいろやつて居るけれども、多くは戯論だけで、實行しようといふ心持が無くて、ただ理論の研究をして見たり、ただ題目を唱へるとか、念佛を稱へるといふことを口先でやつて見たり、表面でやつて見たり、必ず自分の身に行つて人生を意義有るものにしようといふ、熱心な態度が缺けて居つた。だから佛教といふものは本當に弘まらなかつたのです。戯論が斷えるといふことになつて、初



めて本當の覺りになつて行く譯であります。

それでありますから短い言葉でありますけれども佛は一大事の因縁の爲に出たのである、人間の本當の一番大事な事を衆に教へてやらうと思つて出たのだと仰しやつた。この言葉を確りと心に捉へて、さうしてこれから後ズット法華經の本文を讀んで参りますと、いろいろな事がありますが、これは皆一大事を説く爲に説かれたのである。人間は如何にして生きるか、生きるこの本當の意味は何だといふことを、腹の底までわかるやうに、本當に徹底的に教

へようといふつもりで説かれたのであると、斯う承知して、そのつもりで讀んで行きますと、一語一句が皆大きな力を有つて來るのであります。

尙ほ更に進んで、その一大事といふのは何を意味するかといふことが説明されて居りますから、更に本文に就いてその深い意味をだん／＼申上げて行きたいと思ひます。今日はチョット餘計な事で自分の氣焰を擧げたりして失禮でありましたが、この場合にそれだけの事を考へて置く必要があらうと思つて申上げたのであります。(第二十講了)

### 宮原六郎氏長逝

曾て統一團協賛會最初の理事長たりし宮原氏は、間もなく腦溢血の爲め引退し、一時諸方の關係を離れて専ら加養中の處、先年立正安國團理事長として病中大に健闘されしが、七月二十二日甲州下部温泉に於て靜養中途に逝去さる。行年五九謹みて哀悼の意を表す。

南無妙法蓮華經

財團法人統一團

## 記事

### 本部團報

五箇盆齋祭 佛教の年中行事の一としても亦國民道徳の普及に於ても、極めて意義の深いこの盆の齋祭りは獎勵すべきであらうと思ふ。七月十五日、曇天續きて比較的涼ぎよい夕の七時より、本團總裁聖應院日生上人を始め、團員諸友等夫々各堂位の同向供養が梶本導師の下に和賀、山口等の諸師と共に、満堂團喜參詣の善男女異口同音に和唱奉行し一同の燒香が訖つたのは八時に近かつた。八時十分より講演に移り、河合勝明氏の開會の挨拶に始まり、此日佐藤將軍の御出講ある豫定であつた處、其數日前から生憎御異例の爲め一歩も外出なされることが不可能なつたので、小林一郎先生の『菩薩道の實現』と題する意義深い長講あつて後、磯部滿事氏の閉會の辭に幕を閉じた。正に時計は十時を報じてゐた。

當日參詣の百名に、梶本師新著『お盆の話』壹部宛贈呈して大に歡ばれた。

法華經講座 昨今流通分に入り普門品の開講中である。或る人は最早正宗分も卒へたから大切な所はないかのやうに思はれるでしようが、私共末法の薄徳垢重の者は、この流通分に於て實際の修行上に大きな教を興へらるゝことを思へば、法華經は日蓮聖人の仰せのやうに、『何れの品も思かならず、一卷一品一偈一句乃至題目を唱ふるも功德は同じ事と思食すべし』なれば彌々聽聞してよく之を思考し實行に移したいものと思ふ。

- 日曜日集會 午後二時より五時迄左の通り開催された。
- 六月三十日 佛院の報恩觀 磯部 滿事氏 信仰の依止處 小西 日喜師
- 七月七日 立正安國論略講 中村 清一氏 大藏經要義講說 梶本 顯正師
- 同二十一日 法華の妙行 磯部 滿事氏 信仰の要旨 和賀 義見師

因に八月中は例年の通り夏期休講を致し、各位の御健勝を毎朝お祈り致してゐます。

### 横濱教誌

六月一日 中區山田町の和田氏が、御一族の聖道良嗣信士及び圓應淨監居士追善のために、東京より小西師を仰いで唱題供養をなされた、磯部先生亦御參加。

同 七日 神奈川県藤原町佐藤氏方にて勸行後、磯部先生の御話『男の仕業は女の力』

同 十二日 神奈川県鶴屋町の京田氏方にて例月の如く唱題會。

同 十四日 中區千歳町の青柳氏方で、磯部先生の御話『信仰の力』尙、此の御法話は青柳氏自家の擴聲器でそのまゝ屋外に流れ出され夏の夜の人々へ多々傳ふる處があつた。

同 十五日 磯子の大内氏方で『燒野の煙子』磯部先生。此日は、大内氏がツイ此間なされた御子さんの五七日を數日繰上げられたのであつたが、先達のツクムと早いのに驚かされる。

同 十八日 長老岩上氏が突然病を發されたのは、本年一月の六日、寒行會第一夜の席上に於てであつた。萬一生命だけは續き得ても

### 二本松報

六月十二日夜、於蓮華寺宗祖伊東法親會修  
 行。  
 同 十五日 二本松佛教不染會托鉢修行。  
 同 十九日 午後一時五十分當縣通過にて  
 遠竹香基故郷に歸る、因て、出迎へ讃經す。  
 同 廿八日 午前二時三十一分當縣通過にて  
 北支那派遣中の旭川部隊歸還兵の歡送す。

### 拜謝

紙面の都合に依り、寄附維持  
 金圓費誌料領收は、尙に乍勝  
 手次號にさせて頂きます。

會計部

豫後の兎角に面倒なる可き腦内の溢血症が、  
 全く言葉通り軽くてすんだことは、日頃同氏  
 が篤信なされる 佛天の御加護と思ふの外に  
 ない。その後同氏は順調に快方へと向はれて  
 約半歳にして殆んど以前と同じ状態に恢復さ  
 れた。そして今、小西師礪部先生を始め、會  
 員一同を自宅へ招かれ、餐を供け、經を唱へ  
 欣然として、本佛の大徳を讃嘆されたのであ  
 る。會する者亦室に溢れ、其々に、且つは禮  
 し且つは慶したのであつた。

同 二十日 中區笠下町の齊田氏方にて會  
 員參集して唱題修行。  
 同 廿四日 磯子の北山氏方にて「慈人の  
 聲」礪部先生。  
 同 廿七日 神奈川三ツ澤の賢藤氏方にて  
 例會、小西師礪部來講。  
 同 廿九日 中區南太田の川又氏方にて有  
 志參集して唱題。

### 福島支部報

を聞く。(支部の方數名、商業學校岩瀨教育  
 師範栗原先生、殊には伊藤高商校長、會長吉  
 松教授、會員二十數名)北陸、關西の各大學  
 高等専門學校御布教の御感想、旅行談乃至之  
 に伴ふ宗教上の感激等々先生の辨は熟して時  
 の移るを知らず、聽く者皆身を忘れたり。先  
 生の御努力により正しき日蓮主義學生聯盟結  
 成の端緒を得たるを祝し合ひ、先生御指導の  
 下にこの目的達成の爲め努力すべきを誓ふ。  
 五時半閉會。

同日 午後七時より、大町中村様方にて支部  
 例會。お盆に因んで孟蘭盆御書の御講義あり  
 十數名の來會者一同法悦に満ちる。

七月六日 (土)十二時半、河合先生御來校に  
 好機逢ふべからず、高商生徒集會所に先生を  
 迎へ、晝食を共にしつゝ、數名の會員談を交へ  
 て論議す。宗教あり、科學あり、藝術あり、  
 乃至スポーツ、天下國家の時事問題等々夕陽  
 既に西山に没し、雨降り雨止み、又雨降り、  
 何時果つべしとも覺えず、七時に至つて去つ  
 て中村様方に至り、更に論議遂に午前二時に  
 及ぶ。

### 本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	金貳拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本多日生上人	特別	送料共	金壹圓七拾錢
勸行作法	特別	送料共	金拾錢
河合彰明著	特別	送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義	特別	送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 財團法人 統一出版部  
 振替東京九四二〇番

### 月刊「教」誌

### 申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 發行所 財團法人統一出版部  
 振替東京一〇九四〇番

定價一統	一冊 金貳拾錢 送料壹錢
	半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
	一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
 ▲我候 御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御  
 通知ノ事

昭和十年七月廿四日 印刷納本  
 昭和十年八月一日 發行

(第四百八十五號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 編輯兼 發行所 磯部滿事  
 印刷人 鈴木日雄  
 東京市品川區南品川二ノ一八一  
 印刷所 都印刷所  
 電話蒸輪六〇二四番

發行所 財團法人統一出版部  
 電話牛込五三三六番  
 振替東京九四二〇番

目 次

本 尊 論 (初 篇)

日蓮教學講座(第二十回)……………河合 陟 明

法華經講話(第二十一講)……………小 林 一 郎

○ 編輯室より  
○ 寄附團費誌料領收

第 十 四 年 九 月 號



統

法財  
人團  
統  
一  
團  
發  
行